『林巨正』の「不連続性」と「未完性」について

波田野　節子

【要約】本研究は、植民地時代に十二年間にわたって新聞連載された歴史小説『林巨正』が未完で終わっていること、および作品の前半と後半で主人公の人間像に不連続性が見られることに注目して、その原因を追求したものである。作者洪命憙が新幹会の仕事で奔走していた一九二〇年代後半に連載を始めた『林巨正』は、光州事件関連で作者が逮捕されたことで中断した。三〇年代初めに出獄した洪命憙は社会運動が閉塞に向かうなか、文化的抵抗として『林巨正』の執筆を再開したが、そのとき取った方針の転換によって主人公の人間像に変貌が生じた。このころ『朝鮮王朝実録』が復刻されて一般人も閲覧が可能になり、洪命憙もこの歴史資料に接して材源とするようになった。このことは『林巨正』に再度の作風の変化をもたらすとともに、日本統治末期の暗黒期に作者が未完のまま筆をおく要因の一つとなった。

目次

はじめに
一　作者・洪命憙
二　作品のあらすじ
（1）「鳳丹編」
（2）「皮匠編」
（3）「両班編」
（4）「義兄弟編」
（5）「火賊編」
三　『林巨正』の書誌
（1）新聞連載本
（2）朝鮮日報社本
（3）乙酉文化社本
（4）国立出版社本
（5）四季節社九巻本／十巻本
（6）文芸出版社本
四　「不連続性」について
（1）不連続の所在
（2）「不連続性」の発現
（3）「不連続性」の発生
a．第一期
b．第二期
c．第三期
五　『林巨正』の「未完性」について
（1）執筆の断念
（2）『林巨正』の材源
（3）『林巨正』と『朝鮮王朝実録』
（4）『朝鮮王朝実録』との出会い
（5）再度の構想
（6）終結の未完
（7）修正の未完
おわりに

はじめに

本研究の出発点は筆者の読書体験である。かなり前のことだが、四季節社の九巻本で『林巨正』をはじめて読んだ筆者は、作品の面白さとテクニックの見事さに驚くと同時に、二つの素朴な疑問をいだいた。一つは当然のことながら、このように素晴らしい作品が未完で終わっていることに対する疑問であり、もう一つは主人公の人間像に見られる不統一だった。林巨正の性格が前半と後半とで連続性を欠いているように思われたのだ。前半で与えられた主人公の強烈なイメージが後半で裏切られることが頻繁に起こり、読みながら何度も違和感を抱いた記憶がある。この二つの疑問を解きたいというのが、本研究の動機である。本稿では、まず作者の略歴と作品のあらすじについて簡単に紹介し、つぎに書誌を概観してから、「不連続性」と「未完性」が生じた原因を追究する。(1)

一　作者・洪命憙

まず、『林巨正』の作者について簡単に紹介する。『林巨正』の作者洪命憙（ホン・ミョンヒ）は、一八八八年に忠清北道の槐山で、豊山洪氏秋巒公派両班の長男として生まれた。曾祖父は哲宗と高宗のもとで観察使、漢城府判尹、吏曹判書を歴任し、祖父も高宗のもとで大司諫、大司憲、兵曹・刑曹参判をつとめた名門で、父親の洪範植も洪命憙が生まれた年に科挙及第している。党派は老論に属し、洪命憙が十一歳で迎えた妻も老論の驪興閔氏出身であった。朝鮮近代文学史上、このような名門両班出身の作家は洪命憙だけであり、非常に例外的な存在といえる。

十三歳でソウルに出て、北村にある祖父の屋敷から中橋義塾という新式学校に通い、新知識と日本語を学んだ。この時期、洪命憙が十五歳のときに生まれた長男が、のちに北朝鮮で著名な言語学者となる洪起文である。一九〇六年に日本に留学して東洋商業学校予科と大成中学校に学び、朝鮮近代文学草創期のこのころ李光洙や崔南善

と交わって三天才と並び称された。[2] 日韓併合を迎えて父の洪範植が殉死すると、洪命憙は、「たとえ死んでも親日をしてはならぬ」という父親の遺言を死ぬまで座右の銘にしたという。

父の喪を終えて中国に渡った彼は、上海で同済社を中心とする独立運動に参加し、またシンガポール等に数年間滞在した。帰国の翌年に起きた三・一運動では故郷の槐山で運動を主導して一年間獄中生活を送り、出獄後は教育・言論・政治の場で活躍して、一九二七年の新幹会立ち上げにさいして主導的な役割を果たした。翌一九二八年、朝鮮日報に長編『林巨正』の連載をはじめる。連載は作者の逮捕や病気のためにたびたび中断しながら実に十二年間におよび、一九四〇年に完全に中断した。生涯に小説としてはこの一編しか書かなかった洪命憙は、この作品によって朝鮮近代文学史に名を残すことになる。

解放後、一九四八年四月に平壌で開催された南北連席会議に出席してそのまま北にとどまり、朝鮮民主主義人民共和国が樹立されると初代副首相に任命された。その後も朝鮮科学院院長、最高人民会議代議員常任委員会副院長など要職を歴任して、一九六八年三月五日に亡くなった。遺体は平壌郊外の愛国烈士陵に埋葬されている。

二　作品のあらすじ

書誌で述べるように『林巨正』にはいくつかの版があるが、ここでは筆者がじっさいに読んだ韓国の四季節社本によってあらすじを紹介する。[3]

歴史小説『林巨正』は燕山朝から明宗朝までの十六世紀前半の朝鮮が舞台になっている。「鳳丹編」「皮匠編」「両班編」「義兄弟編」「火賊編」の五編で構成されているので、以下、編ごとに簡略に内容を紹介する。

(1)「鳳丹編」

燕山君の暴政時代に白丁の婿になって難を免れた両班の野談が下敷きになっている。[4] 燕山君の不興を買って巨済島に流された弘文館校理李長坤は、甲子士禍がおきると加罪をおそれて逃亡し、咸鏡道で柳白丁の娘楊鳳丹の婿となって身を隠す。両班でありながら白丁として虐げられるという稀有な経験をもった李長坤は、中宗反正で復権すると、自分がもし白丁に生まれていたら大盗賊になるだろうと、林巨正出現の予告ともみなされる感慨をもらす。李長坤はソウルに戻り、中宗のはからいによって鳳丹は白丁の身で淑夫人に叙せられて都に迎えられる。彼女の縁で咸鏡道から上京して楊州の牛白丁の婿になった母方の従弟林トルが、未来の林巨正の父である。両班の体面をかなぐり捨てて逃亡し、飢えのために糞まで口にした李長坤の生命への執着と、反骨精神が旺盛で両班嫌いのトルの野性が交差した地点に、やがて巨正は生まれることになる。

(2)「皮匠編」

「皮匠編」の前半では、鳳丹の叔父である白丁学者カッパチ（靴職人）と儒者政治家趙光祖との交友、および趙光祖が失脚する己卯士禍の様相が描かれ、後半では、巨正が生まれてから二十歳で結婚するまでが描かれる。巨正は生まれながらに気性が荒くて反抗的な子供だった。手を焼いたトルから巨正の教育を頼まれたカッパチは、彼をソウルの自分の家に連れてくる。巨正はカッパチの弟子のユボギや鳳学と仲良くなって義兄弟の契りを結ぶが、三人はやがて散り散りになる。異人カッパチは巨正の未来を予見しながらも、その性格を学問によって矯正しようとはせず、むしろ本来の個性をのばすよう指導する。ある意味で、巨正を盗賊の道へと導いたのはカッパチだということもできる。[5] 成長した巨正は、出家して瓶亥大師となったカッパチと全国を回り、旅の途中、白頭山で逃亡官婢の娘雲龍と結ばれる。

（3）「両班編」

「両班編」では中宗の死、その長男仁宗の死と次男明宗の即位、そして文定王后の垂簾聴政を背景にして権勢をにぎる外戚尹元衡や怪僧普雨の出現など、乱れた上層社会の様相が描かれる。身分差別に虐げられる巨正は両班を憎み、両班の支配する世間とかかわる気をなくしていく。巨正が三十五歳の年に乙卯倭変が起きる。巨正は鳳学とともに募兵に応ずるが、白丁という身分のために従軍を拒否され、軍隊の外から鳳学を見守ろうと単騎出征する。そして鳳学が霊巌城の戦いで倭兵に囲まれたとき、間一髪で彼を救出する。このとき巨正が鳳学とともに救出した人物が、のちに討捕使として林巨正を処断することになる南致勤である。

（4）「義兄弟編」

「義兄弟編」は八つの章からなっている。最初の七章は、巨正の六人の義兄弟「朴ユボギ」「郭オジュ」「吉マッポンィ」「黄天王童」「裵トルソギ」「李鳳学」と裏切り者「徐霖」の名前がタイトルになっており、彼らがそれぞれの章の主人公として活躍する。そして最後の「結義」の章で、巨正と六人の男たちは義兄弟の契りを結ぶ。

まず、巨正の出征中に、父の仇を討って逃亡したユボギが青石洞（チョンソッコル）に迷いこんで盗賊呉哥と出会い、そこに住みつく。つづいて、妻をなくし、泣きやまぬ乳飲み子を殺して精神に異常をきたした作男の郭オジュ、人に頼まれてオジュを捕らえようとした塩売りの吉マッポンィ、巨正の妻の弟で鳳山の将校になっていた黄天王童、その友人で敬天の駅卒裵トルソギ、そして平壌監司のもとで横領を働いて逃亡した元官吏の徐霖が、社会からはじき出されるようにして次つぎと青石洞に集まってくる。青石洞の一党は徐霖の立てた策で平壌監司の進上品を奪い、一部を巨正に贈る。密告によってその進上品が発覚すると、巨正は家族のために牢破りをして、盗賊になる決意をする。臨津別将になっていた李鳳学も、巨正の逃亡を助けたことが露見して青石洞に入る。巨正の怪力と剣道をはじめとして、ユボギの手裏剣、鳳学の弓、トルソギの投石、オジュの鉄殻竿、天王童の縮地法、マッポンィの怪力等、全員が何らかの特技を持っており、各章では、主人公たちそれぞれの婚姻譚がストーリー展開の重要な要素となっている。

こうして集まった巨正と六人の男たちが、「結義」の章において、いまは亡きカッパチの木像の前で義兄弟の契りを結ぶ。

（5）「火賊編」

「火賊編」は、「青石洞」「松岳山」「巣窟」「笛」「平山戦」「慈母山城」の章からなる。「青石洞」の章で、巨正は全員に推されて青石洞の大将になる。官軍が青石洞に攻めてくると、徐霖は巨正に野望を吹き込み、将来のために今は官軍との衝突を避けるよう進言する。進上品の処分もかねて都に行った巨正はそこで三人の妻を娶り妓生のソフンとも結ばれるが、押しかけてきた妻雲寵との壮絶な夫婦喧嘩のあと山に戻る。青石洞の大将として君臨するようになってからの巨正は、廣福山での村民虐殺、偽巨正ノバムや女性たちとの放埒な関係、家族への家父長的な態度など、以前とは違った印象をあたえる行動をとるようになる。

「松岳山」の章では、松岳山の端午クッを見物に行った青石洞の一行が騒動に巻き込まれて、大王大妃の代理である尚宮を人質に大王堂に立てこもり、駆けつけた巨正に救出される。「巣窟」の章では、巨正が両班に変装して各地の郡守の接待を受け、また都で捕縛されそうになり大立ち回りを演じて逃亡する。このとき捕まった妻たちを救出しようと巨正は破獄を計画するが、結局断念する。「笛」の章は、科挙帰りに青石洞に連れこまれた儒生たちの話と、笛の名手宗室端川令が伽耶琴の名手である寧辺の妓生を訪ねた帰りに青石洞に捕われて笛を吹く話からなっている。「平山戦」の章では、都で捕まった徐霖が自白し、官軍五百名が巨正らのひそむ馬山里を急襲する

が、巨正一党はわずか七名で迎え撃って逃げおおせる。

「慈母山城（上）」では、朝廷が林巨正討伐のために、黄海道と江原道に巡警使を派遣する。黄海道の巡警使が妓生におぼれて載寧から軍を動かさないのを、青石洞と家族が避難した海州の両方へ攻撃をかける準備だと誤解した巨正たちは、青石洞を捨てて慈母山城へ移ってゆく。「慈母山城（下）」には、妻との思い出が残る青石洞にひとり残ったさびしげな呉哥の姿が描かれ、ここで『林巨正』は中断している。

三　『林巨正』の書誌

つぎに『林巨正』の書誌を整理しておく。『林巨正』は一九二八年から四〇年まで十二年にわたって『朝鮮日報』紙と雑誌『朝光』に連載された。連載中断ののち、解放前、解放後、そして作者が越北したあとの北朝鮮においてと、三回単行本として刊行されている。朝鮮戦争後は南では禁書となり、北でも絶版となっていたが、[6] 八〇年代に入ると南北の両方で刊行された。以下では、（1）新聞と雑誌に連載されたものを新聞連載本、（2）解放前に朝鮮日報社から刊行されたものを朝鮮日報社本、（3）解放後に乙酉文化社から刊行されたものを乙酉文化社本、（4）作者の越北後、一九五〇年代に北朝鮮で刊行されたものを国立出版社本、（5）一九八五年と九一年に韓国の四季節出版社から出されたものを四季節社九巻本および十巻本、（6）一九八〇年代に北朝鮮で刊行されたものを文芸出版社本として、それぞれについて概観する。

（1）新聞連載本

一九二八年から一九四〇年までの連載状況を、四季節社十巻本と対応させてまとめたのが表1である。長期にわたる連載中に休載は何度もあったが、本格的な休載は一九二九年末に逮捕されてからの三年間と、一

表1　新聞連載本

	連載期間	連載紙誌	タイトル	章タイトル	四季節社十巻本との対応
第1期	1928.11.21 ～ 1929.12.26	朝鮮日報	林巨正傳	이교리 귀양／왕의 무도／이교리 도망／이교리의 안신／게으름뱅이／축출／반정／상경／두 집안	1巻「봉단편」
				교유／술객／사화／뒷일／형제／제자／분산／출가	2巻「피장편」
				국상／살육／익명서／보복／권세／보우／왜변	3巻「양반편」
	逮捕による中断				
第2期	1932.12. 1 ～ 1934. 9. 4	同上	林巨正傳	박유복이（一）～（四） 곽오주（一）～（三）	4巻「의형제편1」
				길막봉이（一）、（二） 황천왕동이（一）、（二）[1] 배돌석이（一）～（三） 리봉학이（一）～（三）	5巻「의형제편2」
				서림（一）～（四） 결의（一）～（四）	6巻「의형제편3」[2]
	1934. 9.15 ～ 1935.12.24	同上	火賊林巨正	청석골（一）～（六）	7巻「화적편1」
	病気による中断				
第3期	1937.12.12 ～ 1939. 7. 4	同上	林巨正	송악산 소굴	8巻「화적편2」
				피리 평산쌈	9巻「화적편3」
				자모산성上（一）～（三六）	10巻「화적편4」
	1940.10月号	朝光	林巨正	자모산성上（三七）下	

(1) 新聞連載では章の番号は非常に乱れている。一部に（二）と番号がつけられた回もあるが、この章は実際には一節で構成されている。

(2) 四季節社十巻本では「서림」の章の（三）と（四）が「결의」の章の（一）と（二）として組み込まれ、「서림」は2節、「결의」が6節になっている。この改変は一九三九年の朝鮮日報社本刊行時におこなわれた。

九三五年から病気を理由に休載した二年間の二回である。それで、新聞連載の時期はこの二回の長期休載をはさんで、表のように三期に分けることができる。なお、新聞での連載が終わった翌年、雑誌『朝光』の十月号に一回だけ『林巨正』が掲載されているが、これは第三期に入れる。長編『林巨正』はこの『朝光』十月号をもって完全に中断した。

タイトルは、連載が始まった当初は『林巨正傳』だったが、第二期の途中、「義兄弟編」が終了して「火賊編」が始まるときに『火賊林巨正』と改題され、第三期が始まるときにふたたび改題されて『林巨正』となった。編にはタイトルがつけられているものとそうでないものがあって、不ぞろいである。[7] 章にはタイトルがつけられているが、番号にかなり乱れが見られる。

(2) 朝鮮日報社本

朝鮮日報紙上での連載が終わった一九三九年、朝鮮日報社では全八巻の予定で『林巨正』を刊行した。新聞予告によれば、終結部を完成させて「火賊篇下」とし、また第一期に新聞連載した三つの巻は最後にまわして「鳳丹篇」「갓밧치篇」「両班篇」というタイトルで刊行するはずであったが、じっさいには「義兄弟篇」(1)(2)と「火賊篇」(上)(中)の四巻しか刊行されなかった。[8]（表2参照）

各巻の分量が比較的多く、「裵トルソギ」の章が第一巻と第二巻、「巣窟」の章が第三巻と第四巻にまたがっているほか、[9] 表を見ればわかるように、章番号のつけ方が乱れているなど、読みづらいところがある。新聞に連載された最後の章である「慈母山城（上）」は、「火賊篇(中)」が刊行された一九四〇年二月にはまだ完結していなかったために、入っていない。この章は、この年の「朝光」十月号に最終部分が掲載されて完結したが、この朝鮮日報社本に入らなかったためか、その後の乙酉文化社本と国立出版社本でも抜け落ちることになった。

表2　朝鮮日報社本

刊行	巻数	編タイトル	章タイトル	四季節社十巻本との対応
1939.10	第一巻	義兄弟篇（1）	박유복이（一）～(四) 곽오주（一）（二）	4巻「의형제편1」
			길막봉이（一）[1] 황천왕동이 배돌석이（一）	5巻「의형제편2」
1939.11	第二巻	義兄弟篇（2）	배돌석이（二）（三） 이봉학이（一）～(三)	
			서림（一）（二）[2] 결의（一）（二）（四）（六）（七）（八）[3]	6巻「의형제편3」
1939.12	第三巻	火賊篇（上）	청석골（一）～(六)	7巻「화적편1」
			송악산（一）[4] 소굴（一）	8巻「화적편2」
1940. 2	第四巻	火賊篇（中）	소굴[5]	
			피리（一）[6] 평산쌈（一）[7]	9巻「화적편3」
未刊行	第五巻	火賊篇（下）		10巻「화적편4」
	第六巻	鳳丹篇		1巻「봉단편」
	第七巻	갓밧치篇		2巻「피장편」
	第八巻	両班篇		3巻「양반편」

(1) 1節構成なのに番号がついている。
(2) 新聞連載時は「서림」が4章、「결의」が4章あったものを、このとき「서림」を2章、「결의」を6章に分け直した。（表1註(2)参照）
(3) 番号が間違ってつけられている。実際には（一）～（六）
(4) 1節しかないのに番号がつけられている。
(5)「소굴」の後半部。章番号の（一）が不要なのか、（二）が抜けているのかは不明。新聞では1節構成になっている。
(6) 1節構成なのに番号がついている。
(7) 同上

初めての単行本である朝鮮日報社本の刊行にあたって、洪命憙は念入りな見直しをした形跡がある。とくに「義兄弟編」では、字句にとどまらず章編成や内容の改変など大幅な修正を加えているが、これについては第五章で詳述する。

（3）乙酉文化社本

解放後の一九四八年に乙酉文化社が全十巻の予定で刊行した。[10] 朝鮮日報社本と同様、終結部を完成させて「火賊編四」とし、そのあと「鳳丹編」「皮匠編」[11]「両班編」の三編を刊行して全十巻にする予定であったが、六巻までの刊行で終わった。（表3参照）

朝鮮日報社本に見られた誤字や脱字の一部に訂正がほどこされているが、章番号の混乱はほぼそのまま踏襲されている。解放後の洪命憙は一九四七年十月に民主独立党を創建するなど政治活動をおこない、翌一九四八年四月には平壌で開かれた南北連席会議に出席してそのまま北にとどまった。このため作者自身が校正する時間はなかったと推測される。

（4）国立出版社本

洪命憙が越北して六年後の一九五四年十二月から翌年の四月にかけて、北朝鮮の国立出版社では『림꺽정』全六巻を刊行した。章番号が整理され、正書法による字句修正がほどこされているほかは朝鮮日報社本や乙酉文化社と変わっていないが、これまでと違って「鳳丹編」「皮匠編」「両班編」および完結編に関してまったく言及していないことが注目される。[12]（表4参照）

表3　乙酉文化社本

刊行年月	巻数	編タイトル	章タイトル[1]	四季節社10巻本との対応
1948. 3	第1巻	義兄弟編一	박유복이（一）～（四） 곽오주（一）（二）	4巻「의형제편1」
1948. 4	第2巻	義兄弟編二	길막봉이（一）[2] 황천왕동이（一）[3] 배돌석이（一）～（三）	5巻「의형제편2」
1948. 6	第3巻	義兄弟編三	이봉학이（一）～（三）	
			서림（一）（二） 결의（一）（二）（四）（六）（七）（八）	6巻「의형제편3」
1948. 7	第4巻	火賊編一	청석골（一）～（六）	7巻「화적편1」
1948.10	第5巻	火賊編二	송악산 소굴（一）（二）[4]	8巻「화적편2」
1948.11	第6巻	火賊編三	피리（一）[5] 평산쌈[6]	9巻「화적편3」
未刊行	第7巻	火賊編四		10巻「화적편4」
	第8巻	鳳丹編		1巻「봉단편」
	第9巻	皮匠編		2巻「피장편」
	第10巻	両班編		3巻「양반편」

(1)「義兄弟編一」所載の「全帙目録」には、章タイトルが以下のように表記されている。
「義兄弟編1」朴遺腹／郭五柱　「義兄弟編2」吉莫奉／黄天王童／裵乭石
「義兄弟編3」李鳳學／徐霖／結義
「火賊編1」青石洞　「火賊編2」松岳山／巣窟
「火賊編3」피리／平山쌈　「火賊編4」九月山城
「鳳丹編」李校理／反正　「皮匠編」交遊／分散
「両班編」國喪／士禍／倭變
(2)（一）は不要。朝鮮日報本の間違いを引き継いでいる。
(3)（一）は不要。朝鮮日報のときは間違っていなかったものが、あらたに誤った。
(4) 2節に分けられているが、2節目には「소굴」とのみあって、（二）の番号はついていない。
(5)（一）は不要。朝鮮日報本の間違いを引き継いでいる。
(6) 朝鮮日報本では（一）がついていたのが、訂正されている。

表4　国立出版社本

刊行年月	巻数	タイトル	章のタイトル	四季節社10巻本との対応
1954.12	第1巻	義兄弟編（上）	박유복이（一）～（四） 곽오주（一）（二）	4巻「의형제편1」
1954.12	第2巻	義兄弟編（中）	길막봉이 황천왕동이 배돌석이（一）～（三） 이봉학이（一）（二）	5巻「의형제편2」
1955. 2	第3巻	義兄弟編（下）	이봉학이（三） 서림（一）（二） 결의（一）～（六）	6巻「의형제편3」
1955.[1]	第4巻	火賊編（上）	청석골（一）～（六）	7巻「화적편1」
1955. 4	第5巻	火賊編（中）	송악산 소굴（一）（二）	8巻「화적편2」
1955. 5	第6巻	火賊編（下）	피리 평산쌈	9巻「화적편3」

(1) 不明。東京外国語大学図書館所蔵の私家版を使用したが、この巻だけ奥付がない。

(5) 四季節社九巻本／十巻本

作者が越北して副首相という要職についたために、朝鮮戦争が終わると『林巨正』は韓国で禁書とされた。[13]『林巨正』を所有することさえ危険な時期もあったが、文学を志す者や知識人の間ではひそかに読みつがれていたという。[14] 一九八〇年代に入ると北朝鮮関連資料が解禁されるようになり、四季節出版社が一九八五年に『林巨正』全九巻を刊行した。[15] この四季節社本にはこれまで一度も単行本になってない「鳳丹編」「皮匠編」「両班編」が最初の三巻として入っている。[16]（表5参照）

四季節社では一九九一年に校正を丁寧にやり直し、あらたに発見された最後の章「慈母山城（上）（下）」を入れて十巻本にして再刊行した。[17] 現在もっとも流布しているのはこの版本である。

(6) 文芸出版社本

北朝鮮では国立出版社本が一九五〇年代後半に絶版になり、その後は忘れ去られた状態だったが、[18] 一九八二年から八五年にかけて文芸出版社が「義兄弟編」と「火賊編」に相当する部分を四巻にまとめた『림꺽정』を刊行した。[19] 林巨正は「大規模の農民武装隊を指揮した人物」[20]となり、そのほか不倫など道徳的に問題のある箇所が削除改変されて、ところどころ原作とは違った形になっている。修正をおこなったのは洪命憙の直系の孫である洪錫中で、彼はこの本に『림꺽정』に前半三編を加えなかった理由を、「後記」で次のように書いている。

「今回、作品を修正して再出版するのを機会に、作家が抜いてしまった前半部分を入れようと思ったのだが、実際にそうしようとしてみると、前半と後半の文学的様相があまりにかけ離れており、修正程度に手を入れたところで、とうてい一つの小説として統合させることはできないことが分かった。作家が新聞に連載した小説を単行本に編んだとき前半部分を捨てた理由は、そこにあったのである。[21]」

なお、一九八五年には、この文芸出版社本を一巻にまとめてストーリーを完結させた少年向き簡

表5　四季節社九巻本

刊行年月	巻数	編タイトル	章タイトル	十巻本との対応
1985. 8.30	第1巻	봉단편	新聞連載と同じ	1巻「봉단편」
	第2巻	피장편		2巻「피장편」
	第3巻	양반편		3巻「양반편」
	第4巻	의형제편1	박유복이（一）～（四） 곽오주（一）（二）	4巻「의형제편1」
	第5巻	의형제편2	길막봉이 황천왕동이	5巻「의형제편2」
	第6巻	의형제편3	이봉학이（一）～（三） 서림（一）（二） 결의（一）～（六）	6巻「의형제편3」
	第7巻	화적편1	청석골（一）～（六）	7巻「화적편1」
	第8巻	화적편2	송악산 소굴	8巻「화적편2」[1]
	第9巻	화적편3	피리 평산쌈	9巻「화적편3」[2]

(1) 소굴が（一）（二）の2節に分けられている。
(2) 피리が（一）（二）の2節、평산쌈は（一）（二）（三）の3節に分けられている。ただし、このように分ける根拠は明らかにされていない。

略本『청석골 대장 림꺽정（チョンソッコルの大将・林巨正）』が、平壌の金星青年出版社から出ている。洪命憙原作・洪錫中潤色とされているが、原作とはかなりかけ離れた作品になっている。

四　「不連続性」について

それでは本論文の目的の一つである「不連続性」の考察に入る。考察は次の手順でおこなう。まず、筆者が読んだ四季節社本によって不連続の所在をつきとめる。[22] つぎに、書誌を参考にしながら、この不連続が読者に意識されるようになった経緯を考察する。そして最後に、なぜ不連続が生じたのかを連載当時の事情を通して考える。

(1) 不連続の所在

それではまず、不連続はどこにあるのか、その所在について検討しよう。作品を通読して気づくのは、第三巻の「両班編」と第四巻の「義兄弟編」のあいだに、一種の断絶が存在していることである。「両班編」は、霊巌城の外で倭兵に囲まれた李鳳学を巨正が危機一髪のところで救出して姿を消すという、緊迫した場面で終わっている。この続きが気になる読者は（筆者がそうであった）、まさに手に汗を握りながら次の巻を開くのだが、期待に反して「義兄弟編」「朴ユボギ」の章は、巨正の留守宅の日常風景から始まってユボギの敵討ちへとつづき、最後まで戦場の話は出てこない。[23] そのために、読者はここで話の流れが途切れたような印象を受けるのである。雰囲気の画然とした変化は、場面が戦場から留守宅に替わったために起こる緊張の弛緩などではなく、より根本的な創作方法にかかわっているように見える。すなわち、事件中心であったそれまでの描写から、登場人物の心理の陰影を会話ににじませる写実的な描写へと重心が移って、まるで絵巻物から自然派の近代絵画に変わったような質的な違いを感じさせるのである。

しかしながら、林巨正の人間像の変化がここで起きているかどうかは、はっきりしない。この「義兄弟編」では巨正の義兄弟たちが主人公で、脇役の巨正はなかなか登場せず、「郭オジュ」の章での虎狩、「吉マッポンイ」の章での仲介場面など、登場してもすぐに姿を消してしまうからだ。巨正から多少違った印象を与えられても、読者はすぐには確信をもてない。まるで作者は、巨正の変貌が読者に与える唐突感を警戒して、時間を稼ぎながら意図的な曖昧化をはかっているかのようである。

だがよく読めば、巨正の人間像に変化が起きているのはやはり「義兄弟編」からである。巨正の出生前から三十五歳までが描かれる前半三編においては、巨正の人間像は一貫している。「鳳丹編」の主人公である李長坤の生命への激しい執着心と、鳳丹の従兄弟トルの荒々しい野性は、ともに巨正誕生の予告である。もし自分が白丁に生まれていたら大盗賊になるだろうという李長坤の言葉の延長線上において、「皮匠編」で巨正は牛白丁トルの息子として生まれる。生まれつき荒々しい性格の巨正は、神の権威を否定して自分の拳の力を信じる強大な意志の持ち主である。だが一方で彼は、月足らずで生まれて母も見放した弟のおしめまで替えて面倒を見る優しさをもち、また女性には潔癖な青年でもある。二十歳の巨正が、白頭山の大自然のなかで育った天真爛漫な雲龍と出会い、二人だけの結婚式をあげて結ばれる場面は、清らかな美しさにあふれている。「両班編」の途中しばらく姿を消して後半十年ぶりで登場する巨正は、[24] 三十五歳の髭面の中年男へと外貌は変わっていても、その人間性は変わっていない。両班の支配を憎み、男女差別をふくむすべての不平等を憎み、世の中がひっくりかえることを夢み、また権力を握ったものが暴力によって世の中を変革すればいいと考える、革命家のような反逆児である。

「義兄弟編」に入って最初は気づかれなかった巨正の変貌は、登場が頻繁になるにつれて徐々にはっきりとしてくる。「李鳳学」の章で見せる、済州島の旌義県令李鳳学を訪ねて官衙に入るのに酒の勢いを借りる巨正らしからぬ気弱さ、鳳学を当惑させる巨正の愚痴めいた世間への批判、また「徐霖」の章で青石洞から送ってきた盗品を

黙って受け取る行為、それらが与えるかすかな違和感は、「結義」の章に入るとしだいに大きくなっていく。とりわけ巨正が盗賊になることを決意するとき見せる長い逡巡は、巨正が当初読者にあたえていたイメージに逆行するものである。「盗賊の力で悪辣非道な世の中をひっくり返すことができるくらいなら、巨正はとっくに盗賊になっていただろう。盗賊が正しくないとか憎いとかいうのではないが、この年になって盗賊になるのも気がすすまなかったし、一人息子の白孫を盗賊にするのはもっと嫌だった」[25]。決断力があったはずの巨正がこんなふうに長いあいだ思い迷ったあげく、徐霖にむかって「徐掌事の言うとおりにするから」[26]と言って、他律的に運命を受け入れる。

女性への態度も一変する。安城での獄破りと七長寺での結義のあと、一行を匿ってくれた吏房の家で彼の妾に誘惑された巨正は、「吏房を裏切るのが申し訳なく、女が自分に尻尾を振るのがけしからんとも思ったが、女のご機嫌をとっておくほうが有利なだけでなく、顔立ちのよい女が横で愛嬌をふりまくのがまんざらでなかったので、女を手に入れ」[27]、屋敷を出るときには、「腐肉を食ってしまったような」後味の悪さを解消するために事実を告げて、恩人を悲劇に追いやる。巨正の変貌は、「火賊編」で青石洞の大将になると決定的になる。都に上って三人の妻を娶り、妓生ソフンとも結ばれ、乗り込んできた妻雲龍に対して暴力をふるいながら、「それが女の狭い了見と言うのだ。同じ人間でも、子どもと大人、召使と主人が同じはずがなかろうが」[28]と言い放つ。巨正は家族に対しては家父長的に、義兄弟たちには権威主義的に君臨し、以前の彼にはあった弱者への思いやりも姿を消してしまう。

巨正が後半で変貌していることを象徴的に表わしているのは、「皮匠編」で若き日の巨正が剣道の師匠に立てた誓いである。（1）罪なき人命を奪わない、（2）女色のために剣を抜かない、（3）不正の財物を奪って善人に与える以外は財物のために刀を抜かない、（4）いわれのない憎しみと客気で剣をふるわない[29]、という四つの誓いのすべてにそむいて、「火賊編」での巨正は、廣福山の住民をはじめ罪のない人々の命を奪い[30]、隣家の寡婦の寝室に忍び込んで刀で脅し[31]、青石洞の贅沢な生活のために人々から税を取り立て[32]、ついには客気のために一族郎党を滅亡の悲劇へと引き込んでいく[33]。若き日に巨正が立てた誓いは、彼がやがては義賊になることを読者に予感させた。しかし後半の巨正は義賊ではない。「笛」の章で、青石洞に拉致されてきたシン進士は巨正に向かって義賊になれと諭すが[34]、作者はこの言葉によって巨正が義賊でない事実を強調しているのだ。

（2）「不連続性」の発現

以上で、『林巨正』の不連続は前半の三編と後半の二編とのあいだで生じていることが明らかになった。ところで先に見た書誌によれば、前半の三編は新聞連載のあと一度も単行本として刊行されていない。朝鮮日報社本と乙酉文化社本では予告だけ出て未刊行に終わり、作者が越北したのちに北朝鮮で刊行された国立出版社本では、最初から抜かれてしまっていた。したがって、この不連続が読者の目に触れたのは新聞連載のときだけである。だが「義兄弟編」連載のまえには三年間の休載期間があったうえ、前章で考察したように主人公の変貌は作者によって注意深くカムフラージュされているので、連載時に気づいた読者は多くなかったと想像される。一九八五年に四季節社ではこの部分を朝鮮日報の新聞連載本から版を起こして最初の三巻として統合し、これによって読者は『林巨正』全巻を通読できるようになった。だが、それと同時に前半と後半のあいだに内在していた「不連続性」が発現したのである。

「不連続性」がはじめて指摘されたのは、刊行して三年後のことだった。一九八八年、四季節社では『林巨正』刊行三周年と洪命憙生誕百周年そして『林巨正』連載開始六十周年を記念して、廉武雄・林熒澤・潘星完を招き、崔元植の司会で「韓国近代文学における『林巨正』の位置」と題する記念座談会を催した。出席者全員が、『林巨正』が禁書であった時代になんらかのルートでこの作品と出会って感動した経験を持っており、座談会は、彼ら

が『林巨正』を読むためにどれほど苦労したかの体験談から始まった。本を求めて古書店を歩きまわった話、ようやく読んだものの前半部が抜け落ちていることを知らず物語の流れに疑問を抱いた話、ハーバード大学図書館にあった新聞連載本の複写を人から借りて読んで感激したが、複写の不鮮明さのために視力が落ちた話など、『林巨正』が神話化されていた時代のエピソードが披露されている。四季節社九巻本の刊行はこのような「文化的断絶」状況に終止符を打ち、『林巨正』はいまや「完全な形でその姿を読者たちの前に現した」[35]のだ。だが皮肉なことに、「不連続性」はまさに『林巨正』全編の通読を可能ならしめたこの刊行によって浮上することになったのである。

「分断以後における、洪命憙の『林巨正』に関するはじめての本格的な論議の場所」[36]となったこの座談会において、最初に問題提起をしたのは廉武雄だった。彼は、洪命憙がなぜ前半編の刊行を後回しにしたのかに疑問を呈しながら、『林巨正』では単行本になった後半部と、そうでない前半部とのあいだに「形象化の程度」「進行速度」「人物の描き方」において大きな差があることを指摘した。[37] この指摘に対して、作品の前後になんらかの「不連続性」があることを出席者全員が認めたが、それが作家の意図したものであるかどうかについては意見が分かれた。日帝の弾圧強化のせいで起こった作家の社会意識の低下が原因だとする廉武雄の主張に対して、[38] 林煐澤は、洪命憙は火賊という群盗形式による反抗の限界を示すために意図的に彼の変貌を描いたのだと主張した。[39] 崔元植も、当時の時代条件が群盗形態の抵抗による革命的変化を許さないという点を強調したかったのだと、林と同じ立場の主張をおこない、[40] 潘星完は、「この問題はこれから具体的な研究を通して明らかにすべき部分だと考えます」[41]と折衷的な意見を述べた。要するに「不連続性」の存在は前提とされて、それが作家の意図によるものかどうかが議論の焦点となったのである。この時このように白熱した論議を呼んだにもかかわらず、その後「不連続性」がテーマとなった論文が出ていないのは残念である。[42]

「不連続性」はなぜ生じたのか、それは作家の意図によるものだったのか、それらを知るためには、執筆中の作家を取り巻いていた状況を見る必要がある。『林巨正』を書きつづけた十二年間、洪命憙は日本が支配する朝鮮に生きながら、日本と現実的・精神的な対決をつづけていた。廉武雄が言うように主人公の変貌が作家の社会意識の低下の表われであるなら、それは日本の植民統治のもとで彼が精神的に追い込まれたということであるし、林煐澤や崔元植の言うように作家の意図によるものだとしたら、それは作家の「抵抗」の一形態ということになろう。どちらにしろ、それは彼がおかれていた状況と深くかかわっていたはずである。そこで以下においては、「不連続性」の発生した事情を解明するために、作家を取り巻いていた状況を具体的に考察することにする。

(3)「不連続性」の発生

先に見た書誌の（1）新聞連載本において、筆者は、十二年にわたる『林巨正』連載期間を、一九二九年末の逮捕による休載期間と一九三五年末の病気による休載期間をさかいにして、三期に区分した。（九七頁の表1参照）以下ではこの三期の区分にそって『林巨正』連載期間中の執筆経緯を考察する。

a. 第一期

一九二〇年代に起こった民族運動と社会運動のうねりの中で、洪命憙は新思想研究会や火曜会の主要メンバーとして新しい思想を積極的に吸収し、『東亜日報』や『時代日報』の編集者や経営者など言論人として活躍し、あるいは五山学校の校長に赴任するなど、思想・言論・教育界で多様な活動をおこなった。そして一九二七年に非妥協的民族主義者と社会主義者の共同戦線である新幹会が設立されると、準備段階から主導的な役割をはたし、創立後も各地の支部設立や大衆運動の支援に奔走した。このころ彼は第四次朝鮮共産党事件で党員の嫌疑をうけ

て検挙され、不起訴放免されている。[43]『朝鮮日報』で『林巨正』の連載がはじまるのは、その一ヶ月後の一九二八年十一月で、洪命憙は四十歳だった。これまで翻訳や評論で文学的な才能は認められていたものの本格的な小説は書いたことのない彼が、政治活動で多忙を極めているこの時期に小説の連載をはじめたのは、生活費を確保するためだったという。[44]

『林巨正』の連載が始まったのは、一九二〇年代の大衆運動の高まりが頂点を迎えようとしている時期である。一九二九年初めの元山ゼネストから十月の光州学生事件へと運動は昂揚し、「日本帝国主義を打倒せよ」というスローガンを掲げて日本の支配に対決する姿勢を鮮明にしつつあった。そのような社会的雰囲気のなかで書いた『林巨正』の連載所感で、洪命憙は次のように書いている。

「林巨正はかつての封建社会でもっとも虐げられた白丁階級の一人物でした。胸にあふれる階級的〇〇の炎をいだいて、彼がその時代の社会に対して〇〇をあげただけでも、どれほど壮快な快挙だったことでしょう。そのうえ彼は戦い方をよく知っていました。それは自分ひとりが陣頭に立つのではなく、自分と同じ境遇にある白丁の糾合をまず図ったことでした。（中略）この必然的心理を利用して白丁たちの糾合をはかったのち、自ら先頭に立って義賊のように痛快に活躍したのが林巨正でした」[45]

洪命憙が巨正に付与していたイメージが、虐げられた階級の人々を糾合して社会に反旗を翻し、先頭に立って闘う「義賊」であったことがうかがわれる。剣道の師匠に立てた巨正の誓いが読者に予感させたように、やがては巨正が義賊として貧しい人々と社会改革のために働くようになることを、作者は予定していたのだろう。だが、この一九二九年の末に作者が逮捕されたことで『林巨正』の連載は中断し、義賊巨正の姿も消えることになる。

新幹会が学生たちの運動を支援するために計画した光州事件真相報告会民衆大会の関係者が事前検挙され、洪命憙も十二月中旬に逮捕されると、「両班編」の連載は二十五、二十六日の二回追加連載をもって中断した。[46]押し寄せる倭兵に囲まれた李鳳学一行を、駆けつけた巨正が救出して姿を消すという緊迫感あふれる最後の二回は、京畿道警察部留置場のなかで書かれたという。[47]「両班編」の最終部分にあふれる異常なまでに緊迫した雰囲気は、作者が置かれていた状況が作品内に浸潤して引き起こしたのではないかと思われる。作家は最後の二回で何とか結末の形はつけたが、このとき流れに断絶が生じたのである。

b. 第二期

洪命憙が出獄したのは、それから二年後の一九三二年一月である。すでに新幹会は解散し、満州事変が勃発して、社会の雰囲気は一変していた。出獄して四ヶ月後に『朝鮮日報』に『林巨正』連載再開の予告記事が出たが、同紙が翌月から会社の内紛で休刊したために連載の再開は延期され、[48]「義兄弟編」の連載が始まったのはその年の十二月一日であった。

あらたな連載を始めるにあたり、洪命憙は中断した「両班編」の続きではなく、次の編の「義兄弟編」から書きはじめた。再開前日に紙上に出た予告には、作者の心機一転の気分がよく現れている。中断した連載小説の再開であるにもかかわらず、このなかで作者は以前の三編についてほとんど触れていない。もともと編ごとに独立性を持たせてあるので、前を読んでない読者もあとの部分を問題なく読んでいけるが、「それでも続きは続きだから」[49]といって今後も登場する主要人物だけ紹介し、中断後のあらすじを簡単に紹介してから、末尾を次のように結んでいる。

「最後に申し添えることがあります。すでに書いた三編は、事実の抜け落ちたものを補充し、事実の錯誤したものを訂正し、だらだら書いた部分は削ったり縮めたりして本にしようと思っています。そうすれば、あるいは最初の腹案のようなものになるかも知れません」[50]（傍点は引用者）

中断した物語の結末をつけて単行本にするのではなく、これまで書いたものが「最初の腹案」と違っていて不満なので書き直すというこの予告は、作者の創作姿勢になんらかの変化があったことを示している。

それでは、作者がこだわっている「最初の腹案」とは何だったのか。予告文の冒頭には、執筆当初の「腹案」が示されている。それによれば第一編は「巨正の血族の来歴」、第二編が「巨正の幼年期」、第三編が「巨正の時代と環境」、第四編は「巨正の友人たち」、第五編で「巨正と友人たちの火賊行為」、第六編で「巨正の子の落ちのび」という六つの編で全体を構成し、各編はそれぞれ一つの短編として読めるように書くのが「腹案」だったという。「しかし手が心のままに動いてくれず、腹案どおり行かないので、恥も省みずともかく回数かせぎで書き続けているうちに、第三編も書き終えずに中断してしまいました」[51]と、作者は反省をこめた述懐をおこなっている。だがこれに続けて、今回は第四編から継続すると書いているので、構成は変更していないことになる。「義兄弟編」は「巨正の友人たち」に関する話であり、つづく「火賊編」は「巨正と友人たちの火賊行為」だからだ。また、編ごとに一つの短編として読めるようにするという方針も、その後変わっていない。それでは「腹案どおり行かない」という反省は何に関するものだったのだろうか。

連載再開後しばらくして『三千里』に掲載された所感「『林巨正』을 쓰면서」のなかに、その手がかりが見られる。このなかで作者は、「これまで監獄まわりなどしているうちに、最初に考えた『林巨正』のプロットをすべて忘れてしまい、このたび朝鮮日報に続編を書くときは再度の構想作りに苦労しました」[52]と書いて、連載再開のために『林巨正』の構想をあらたに作り直したことを明らかにしている。記憶力のよさで有名だった洪命憙が最初の構想をすっかり忘れたという言葉はにわかに信じがたいが、ともかくも彼が「義兄弟編」の執筆のために構想を練り直したことは確かである。このとき「最初の腹案」について反省をおこなったのであろう。反省の内容は、末尾にある次のような言葉が示唆している。

「この小説を最初書きはじめるにあたって、決心したことが一つあります。

朝鮮文学というと、昔のものは大半が中国文学の影響を強く受けていて、事件とか、こめられた情調が我々とは遊離している点が多く、また最近の文学は欧米文学の影響を強く受けていて、洋臭があります。そこで、『林巨正』だけは、人物にしろ描写にしろ情調にしろ、すべて他人からは服一着たりとも借りずに、純朝鮮製にしようと思いました。〝朝鮮情調で一貫した作品〟、これが私の目標でした」[53]

つまり、洪命憙が反省をしたのは、「朝鮮情調」という創作方針に関してであったと思われる。「小説を最初に書き始めるにあたり」とあるから、作者がこの方針を立てたのは第一巻の「鳳丹編」を書き始めたときであるが、実際には作者は当初この方針にそれほど厳格であったように見えない。たとえば初回の「머리 말씀」では、冒頭をどう書き始めたらよいか迷いながら中国の『水滸伝』や『三国志』の例を引き合いに出しているし、過去の文学観が通用しなくなったことの比喩に「象牙の塔が砕けてミューズ神が姿を消す」などという、いわゆる「洋臭」のただよう表現も使っている。野談を下敷きにした鳳丹と李長坤の物語や、「皮匠篇」「両班篇」に描かれた両班や妓生たちの姿には「朝鮮情調」が感じられるが、カッパチの個性重視の放任教育と自然礼賛思想、そして何よりも時代を飛び越えたかのような巨正のラディカルな平等思想は、「朝鮮情調」とは相容れない感がある。おそら

く連載当初の洪命憙はこの方針にさほど厳密ではなく、また実際問題として、新幹会の活動に奔走する生活のなかでこの方針に神経を使うだけの余裕もなかったのであろう。そのうえ、周囲の緊迫した政治状況は作品内部に流れこんで、巨正は十六世紀の火賊とは思われない近代的な変革思想の持ち主になっていた。「義兄弟編」の構想を練ったとき、洪命憙はこれまでの創作姿勢を反省して、創作方針を「最初の腹案」に引き戻すことを決意し、全体を「朝鮮情調で一貫した作品」にするために前半三編も書き直すことにしたのだと思われる。

では洪命憙は、なぜこの時期に創作方針を「朝鮮情調」へと引き戻したのか。それは彼が出獄後に見いだした社会状況と密接に関連している。すでに新幹会は解散し、社会運動は弾圧を受けて閉塞に向かいつつあった。入獄前とは状況がすっかり変わったことを認識した洪命憙が、その状況を自分なりに克服しようと模索したことは想像に難くない。このとき彼は朝鮮固有の文化の再現固守という、ある意味では文化による抵抗運動ともいえる姿勢を取ろうとしたのだろう。すなわち『林巨正』に「朝鮮情調」をこめることが文化的な抵抗運動になると考えたのである。

彼にこのような方針転換を促した要因の一つとして、新幹会が挫折したあと非妥協的民族主義者たちが起こしていた朝鮮学運動（朝鮮文化復興運動）の存在がある。姜玲珠は、洪命憙が朝鮮学運動を推進していた文一平、鄭寅普、安在鴻と個人的に強い深いつながりをもっていたこと、この運動に思想的に影響を与えた申采浩とも親交が深くて彼の思想に精通していたこと、そして新幹会で非妥協的民族主義者たちと共闘して民族統一戦線をつらぬいたことなどから、彼らと洪命憙とは思想的に非常に近い位置にあったと見ている。[54] 出獄後、困難な時代を生き抜くための模索をせまられた洪命憙に、この運動は示唆をあたえたと思われる。

第二期の洪命憙は、政治活動とは無縁な生活を送らざるをえない状況下で、「義兄弟編」の執筆と読書に専念した。当時鍾路の益善洞に住んでいた彼は、午前中は原稿を書き、午後になると仁寺洞あたりの古書店に顔を出して、常連の金台俊から国文学や歴史の質問を受けたりするという生活を送っていたという。[55] 執筆のかたわら彼は朝鮮文化と歴史に関する研究をした。その成果は一九三〇年代後半の文筆や対談のなかに見られる。また、後述するように、洪命憙はこの時期にはじめて『朝鮮王朝実録』と出会っている。[56] 彼はこの歴史資料を研究し、その後『林巨正』にはしだいにその影響があらわれてくる。

このように執筆と研究に専念する生活を送りながら、洪命憙は『林巨正』を「朝鮮情調で一貫した作品」にするために努力した。「義兄弟編」では朝鮮の民俗風習に関する描写が多くなり、巫堂（ムーダン）、相撲（シルム）、後家さらい、虎狩、婿選び、結婚式の風習から警察機構、地名の由来、市場の取引単位まで、あらゆる場面でさまざまな朝鮮固有の文化が紹介されて、朝鮮情調が色濃く流れるようになる。そうなると、そこで生きる人間の姿もその空間の産物でなくてはならない。近代的な平等思想をいだいて、身分や言語に関するラディカルな言辞を弄する巨正は姿を消し、[57] 十六世紀前半の朝鮮を生きるリアリティをもった火賊の首領が現れてくる。自分を抑圧する者に対する憎悪と運命への反逆心は変わらないが、その対象はもはや変革可能な社会制度ではない。内部に鬱屈する反抗心が客気となって周囲の人間たちを悲劇に巻き込んでいく巨正は、こうして現れたのだ。

「義兄弟編」の連載は二年半で終わり、一九三四年九月にはタイトルを『林巨正傳』から『火賊林巨正』に変えて「火賊編」の最初の章「青石洞」の連載がはじまった。この年、カップの第二次検挙事件が起き、翌年カップは解散している。一九三五年に入ると病気休載が多くなって、二月からは五ヶ月以上も休載し、[58] 結局、十二月に「青石洞」の章を終えたところで『林巨正』は作者の病気という理由で再度中断した。

以上で見たように、巨正の人間像の後半の変貌は、作者が創作方針を見直して「朝鮮情調で一貫した作品」をめざしたために起こったものだった。周囲の社会状況に迫られてのこととはいえ、作家自身が意図した「自意半、他意半」の方針転換であった。このとき作風を変化させた作者は、後日前半部を書き直して全体を統一させるつ

もりであった。しかし、その後おこなった再度の創作方針転換のために、結局、書き直さずに終わることになる。

c．第三期

二年後の一九三七年十二月、タイトルをそれまでの『火賊林巨正』から『林巨正』に変えて、「火賊編」が再開した。連載は作者の体調不良のための休載を繰り返しながら続いたが、「慈母山城（上）」の章に入ると休載の頻度がはげしくなり、一九三九年七月四日を最後にとうとう完全に中断した。

その三ヶ月後に、朝鮮日報社による『林巨正』単行本の刊行がはじまった。十月に「義兄弟篇(1)」、十一月に「義兄弟篇(2)」、十二月に「火賊篇(上)」、翌一九四〇年二月に「火賊篇(中)」と、刊行は矢継ぎ早につづいたが、そのあとの「火賊篇(下)」がなかなか出ないうちに、八月には『朝鮮日報』自体が廃刊になった。まもなく『朝鮮日報』の姉妹誌である『朝光』十月号に連載再開と称して「慈母山城（上）」の終結部と「慈母山城（下）」の冒頭部が掲載されたが[59]、この一回で終わった。これは「火賊篇(下)」の冒頭部に入るはずだったものである。あるいは作者はこの時点で単行本による完結を断念し、書いてあったものを発表したのかもしれない。「火賊篇(下)」はついに刊行されず、そのあと刊行を予定されていた「鳳丹篇」「皮匠篇」「両班篇」も同じ運命をたどった。このとき修復されなかった前半と後半の「不連続性」は、四十五年後の四季節社九巻本で発現することになる。

五　『林巨正』の「未完性」について

先に見たように、創作方針の転換によって生じた「不連続性」を修復するために洪命憙は当初、前半三編を書き直すつもりであった。「事実の抜け落ちたものを補充し、事実の錯誤したものを訂正し、だらだら書いた部分は削ったり縮めたりして」という具体的な記述からは、書き直しへの意気込みが感じられる。だが結局のところ、書き直しは実行されなかった。「一貫した作品」にするために必要だと作者がみなしていた「不連続性」の修正が未完に終わったわけである。こうしてみると、『林巨正』には二つの「未完性」があることになる。一つは物語が完結しなかったという意味での「未完性」だが、もう一つは作者が予告していた前半部の修正が実現せず「不連続性」が解消しなかったという意味での「未完性」だ。前半部と終結部の二つの「未完性」が確定したのは、朝鮮日報社の単行本刊行の時である。このとき洪命憙は小説を完結させると同時に七年前に予告した前半部の修正を行なおうとしたが、ともに果たせなかった。一九三二年の時点で可能だと考えていた修正をこの時できなかった理由は、時期的に見て、小説を完結できなかった理由とかかわりがあると思われる。以下では、作品の完結と修正をさまたげた共通の要因について考えたい。

(1)　執筆の断念

洪命憙が『林巨正』執筆を放棄した理由について、姜玲珠は、連載ストップの直接の原因は作者の健康問題だが、もし最後まで『林巨正』を執筆していたら、洪命憙も他の著名人士のように親日行為を強要されていたであろうと、彼がそのような事態に陥るのを避けたことを第二の理由に推論している[60]。非常に慎重で、つねに先々のことを考えて行動する性格だった洪命憙としては、十分にありうることである。第二期執筆を中断したのち、ソウル城外の麻浦に居を移して隠遁に近い生活を送っていた彼は、訪ねてきた記者から政治活動をしていたころが懐かしくないかという質問を受けて、「どの席上にも顔が見いだされる者ほど愚かな者はない[61]」というゲーテの言葉をあげながら、顔を出そうにも出す場所がない自分はゲーテのお叱りを受ける心配はないと、現在の状況を皮肉っている。彼が「席上に顔を出しつづけること」の愚かしさと危険を避けていたことをうかがわせる[62]。新聞連載が完全に中断した一九三九年末からはさらに奥まった楊州郡蘆海面倉洞に移り、病気を理由に蟄居をつづけた[63]。

第三の理由として姜玲珠は、「当時の暗黒の現実に対する彼の悲観と絶望」[64]をあげている。ストーリーは巨正が一族郎党をひきつれて青石洞から慈母山城に移るところにさしかかっていた。このあと官軍に追われて慈母山城から九月山城に移り、ついには滅亡していく林巨正たちの運命を、この暗澹たる日帝末期に書きつづける意欲を洪命憙は失ってしまったというのである。これら三つの理由に論者は全面的に同意する。だが、このようないわば外的な理由のほかに、作品内部にも『林巨正』を未完の運命に導いた要因があったのではないだろうか。その一つの可能性として、『林巨正』の材源の問題が考えられる。

（2）『林巨正』の材源

はじめて四季節社九巻本『林巨正』を読んだとき、筆者はこれが未完の小説であることを知らなかったが、最後の巻まで来て、小説があと一冊くらいでは終わらないだろうと思ったことを覚えている。しだいに緩慢になっていく展開スピードと、あまりに詳細な描写のせいだった。同時代の評論家李源朝はこの時期の『林巨正』についての評論で（彼はそれ以前の部分は読んでいないと率直に書いている）、この作品には作者の主観が現れていないと指摘し、「作家が作品のなかに出てこず、後ろに座って話しているような作品というのは、材料があればいくらでも書くことができる」[65]（傍点は引用者）と評している。筆者もまた、物語が「いくらでも」続くような感覚にとらわれたのである。

それでは李源朝のいう「材料」、すなわち洪命憙が『林巨正』を書くにあたって使用した資料は何か。『林巨正』には材源として『朝鮮王朝実録』（以下『実録』とする）と数多くの野史、野談、民間説話等が使われている。先述の四季節社の座談会で、林熒澤は『林巨正』の材源について語っている。彼は、『林巨正』は、『実録』と『寄齋雑記』の林巨正関連の記述を骨格として、そこに『大東野乗』『燃藜室記述』などの各種資料から取ってきた説話で「肉付け」し、「化粧」を施し、「滑稽味」をつけたものであって、「ちょっと大げさに言えば、碧初が自分で作りだした話はほとんどないほどです」[66]と述べながら、洪命憙の「豊富な読書力と創造力と想像力」を賞賛している。洪命憙は、膨大な資料から適切な材料をえらび、自分の内部で完全に消化したうえで、あらたな物語を創造したのである。

ところで野史や野談、民間説話の類は数も重複も多いので、どの資料が『林巨正』のどの部分に直接の影響を与えているかを特定するのは難しい[67]。しかし『実録』については、材源となった箇所の特定が比較的容易である。林熒澤と姜玲珠が編集した『碧初洪命憙와『林巨正』의研究資料』には『実録』に見える林巨正関連記事が四十八件収録されているが、それらを『林巨正』と照らし合わせてみると、『実録』が材源とされているのは物語の後半だけで、それも小説が最後に近づくにつれて比重が高くなっている[68]。

洪命憙が『林巨正』前半で『実録』を材源としていない理由は明らかである。一般の人々が『実録』を見ることができるようになったのは復刻版が出た一九三二年からのことで、第一期のころの洪命憙は『実録』を材源にしたくてもできなかったのだ[69]。つぎに『実録』が小説の後半においてその比重を増していることには、第二期のはじめに洪命憙が回帰した創作方針「朝鮮情調」との関わりが考えられる。洪命憙は小説に「朝鮮情調」をこめるために、あらゆる場面に朝鮮固有の文化と風俗をちりばめた。そして先に見たように、巨正が「朝鮮情調」の流れる空間で生きる人間へと変貌したことが、小説に「不連続性」を生じさせたのだった。巨正が生きていた時間と空間、それは十六世紀の朝鮮である。作品に「朝鮮情調」をこめるためにも洪命憙は歴史研究の必要を感じたはずである。また、彼のまわりの人々が行なっていた朝鮮文化復興運動もそれをうながしたと思われる。第二期以降、政治活動を封じられて執筆と研究に専念した洪命憙が歴史研究を行なっていたことは、一九三〇年代後半の彼のコラムや口述記事などからうかがわれる。洪命憙は、「朝鮮王朝五百年の歴史はすなわち両班階級の歴史

である[70]」と考えて両班を研究し、一九三〇年代後半には、巨正の生きた十六世紀を「両班階級の発達期」とみなす見解を持つようになっていた[71]。彼の「歴史的事実を事実どおりに知ろう[72]」という姿勢の歴史研究が深まるにつれて、『実録』は『林巨正』における材源としての重みを増していったと思われる。そこで、以下では材源としての『実録』と『林巨正』との関係について考察する。

（3）『林巨正』と『朝鮮王朝実録』

朝鮮王朝の正史『朝鮮王朝実録』は、朝鮮太祖から哲宗にいたる二十五代四百七十二年間の歴史を年月日順に編年体で記録した千八百九十三巻八百八十八冊の膨大な書物である。正本のほかに副本が作成され、複数の地方史庫に保管されたおかげで何度かの火災や戦火にも全失を免れた。日韓併合の当時には四つの地方史庫に保管されていたが、総督府は赤裳山史庫本を旧皇室蔵書閣、太白山史庫本と江華鼎足山史庫本を朝鮮総督府の奎章閣に移し、五台山本を東京帝国大学に寄贈した。東京帝大の寄贈本が一九二三年の関東大震災で焼失すると、京城帝大は全実録を写真版で四分の一縮刷復刻する作成に着手し、奎章閣にあった太白山本と江華本は京城帝国大学附属図書館に移された[73]。一九三二年には三十部が出版されたがほとんどが日本に送られ、朝鮮に残ったのは八部だけだったという[74]。

『林巨正』の連載がはじまった一九二八年には『実録』はまだ復刻されておらず、一般人は『実録』を目にすることができない状態だった[75]。復刻版の刊行が一九三二年の何月であり、どこに置かれて、一般人はどのような形で目にすることができたのかは、調査できなかった。おそらく洪命憙は京城帝大の付属図書館のようなところで『実録』を閲覧したのではないかと想像される[76]。洪命憙が『実録』の復刻版を初めて手に取ったのがいつ、どこでのことかは不明だが、彼と『実録』との「出会い」の時期は小説のテキストを分析することで推測が可能である。ここでいう「出会い」とは、それを手に取ることではない。作家が熟読して自己の内部で完全消化し、あらたな物語を創造する段階にいたる内的な「出会い」であり、手に取ってからある程度の時間を要することは言うまでもない。

（4）『朝鮮王朝実録』との出会い

洪命憙は復刻版が刊行された一九三二年の一月に出獄して、十二月に「義兄弟編」の連載をはじめている。したがって、論理的には「出会い」の可能性は「義兄弟編」連載の開始前から存在する。「義兄弟編」は一九三四年九月四日で終了して、ひきつづき十五日から「火賊編」が始まった。「火賊編」ではごく最初から『実録』が材源として使われているほか[77]、巨正に三人の妻がいたという『実録』の記事がモチーフになっているので[78]、「火賊編」構想の段階で作者が『実録』と出会っていたことは明らかである。つまり洪命憙は「義兄弟編」執筆直前か執筆中に『実録』と出会ったことになる。

そこで「義兄弟編」のテキストのなかで『実録』と接点がありそうな部分をチェックしてみると、「朴ユボギ」「郭オジュ」「吉マッポンイ」「黄天王童」「裵トルソギ」の章では高位の両班は登場せず、当時の政治状況との接点も見出せないが、「李鳳学」の章に入ると『実録』に名前の載っている両班が登場するようになる。李鳳学が乙卯倭変のあと仕えた全州府尹李潤慶は小説のなかでも史実でも、全羅道観察使、京畿道観察使、漢城府右尹、咸鏡道観察使、兵曹判書という官職を歴任しており、弟の李浚慶も議政府右贊成兼兵曹判書や右議政という高位にある。そして李鳳学の運命の浮き沈みは、彼らの官職とつねに深い関係にあるのだ。

そこで「李鳳学」以下「徐霖」「結義」の三つの章を丹念に読み直したところ、気になる点が出てきた。李鳳学が済州島に赴任してからあとの物語内の時間が曖昧なのである。それまでと違って季節感もなくなり、いつ年が

替わったかも分からなくなっている。旌義県監として済州島に赴任した李鳳学は、都に戻った李潤慶に自分を呼び寄せるように嘆願している。ところが念願かなって鳳学が五衛部将に昇任して漢城に行くことになるくだりは、経過の説明もなく非常に唐突である。[79] あるいは落丁でもあったのではないかと思って新聞連載本と照らし合わせたところ、驚いたことに新聞連載本の十二行が朝鮮日報社本では削除されていることが分かった。[80] 削除された部分の内容は、鳳学が済州島に赴任して二年が過ぎた秋、済州島特産の黄柿を進上した帰りの船で李潤慶から京職昇任の前触れが届き、その一ヶ月後に昇任の知らせが届くというもので、季節感もあり、時間の経過も明瞭である。こうして朝鮮日報社本では時間の経過が意図的に曖昧にされていたことが明らかになった。[81] そこで時間の推移を中心にして、「義兄弟編」の朝鮮日報社本と新聞連載本との対照作業をおこなった結果、季節や時間に関する記述が随所で削除あるいは改変されており、新聞連載本では一五五五年の乙卯倭変から一五六〇年の結義まで五年であった小説内時間が、朝鮮日報社本においては結義が一五五八年とされ、二年短縮されていることが分かった。（表6参照）結義の場面で全員が年齢と出生年を名乗っているためにその年が何年であるかが分かるのだが、朝鮮日報社本では全員が二歳年下に替えられている。[82] こうやって小説内の時間を五年から三年に縮めたために、作者は随所で季節と時間にかかわる記述の修正や削除をせまられたのだ。

時間の変更にともなって官職に関する記述の変更も行なわれている。たとえば李潤慶の官職についての一例を挙げると、巨正の家に進上品があるという密告で家族が捕まったとき、巨正の姉は少しでも一家の立場をよくするために、まえは全羅道監司でいまは咸鏡監司をしている両班と知り合いだと話し、それを聞いた楊州郡守は、咸鏡道観察使から最近兵曹判書に昇任した李潤慶のことだと気づく。[83] ところが朝鮮日報社本では、兵曹判書に昇任したという部分が削除されている。[84] 史実では李潤慶が兵曹判書になったのは一五六〇年一月なので、この場面の時期を一五五八年に変えたときに不正確を嫌った作者が変更したのであろう。官職に関して行なわれた最大の

表6

新聞連載本 年	新聞連載本 内容	官職記録（『実録』）	朝鮮日報社本 内容	朝鮮日報社本 年
1555（乙卯）	出征 李潤慶、全羅観察使になる 全州で李潤慶の裨將となる 桂香と出会う	1555.8 李潤慶、全羅観察使になる 1555.11 李浚慶、兵曹判書になる	出征 李潤慶、全羅観察使になる 全州で李潤慶の裨將となる 桂香と出会う	1555（乙卯）
1556（丙辰）	春、倭寇退治遠征 李潤慶、京畿観察使になる 夏、済州島の旌義縣監になる 冬、上等表彰される	1556.8 李潤慶、京畿観察使になる	春、倭寇退治遠征 李潤慶、京畿観察使になる 夏、済州島の旌義縣監になる 冬、上等表彰される	1556（丙辰）
1557（丁巳）	春、大静縣監を兼ねる 夏、中等になる 李潤慶、漢城右尹になる 冬、また上等になる	1557.9 李潤慶、漢城右尹になる	春、大静縣監を兼ねる 夏、中等になる 李潤慶、漢城右尹になる	1557（丁巳）
1558（戊午）	二月、ソウルに行こうとして断念する 夏と秋が過ぎる 五衛部将に昇任する 巨正が来る		五衛部将に昇任する 巨正が来る 漢城へ 官職を剥奪される 李浚慶が政丞になったばかりである[1] 軍器寺長になる 李潤慶、咸鏡観察使になる 臨津別将になる	
1559（己未）	二月中ごろ、漢城へ 官職を剥奪される 軍器寺長になる 李潤慶、咸鏡観察使になる 臨津別将になる	1558.8 李潤慶、咸鏡観察使になる 1558.11 李浚慶、右議政（政丞）になる		
1560（庚申）	春、密告事件 巨正のために船を出す 発覚して青石洞へ 夏、結義（辛巳生、四十歳）	1560.1 李潤慶、兵曹判書になる	春、密告事件 巨正のために船を出す 発覚して青石洞へ 夏、結義（辛巳生、三十八歳）	1558（戊午）

(1) 新聞連載本では「李判書」だったのが、朝鮮日報社本で「政丞になったばかり」に替えられている。（『林巨正第二巻』、二三二頁）しかし、この表にあるように李浚慶が右議政になったのは李潤慶が咸鏡監司になった後のことなので、作者がどうしてわざわざこのような変更を行なったか不明である。李浚慶は一五五八年五月に左賛成になり十一月に右議政になっているので、あるいは洪命憙が読み違えたのかもしれない。

削除は、巨正の逃亡を助けて船を出した臨津別将李鳳学の処分について廷臣たちが話しあう場面である。一五六〇年夏に領議政尚震、兵曹判書李潤慶、刑曹判書元継儉、捕盗大将金舜皐の四人が集まって処分を検討する、連載一回の半分以上をしめるこの場面が、[85]朝鮮日報社本では完全に削除されている。[86]時間を二年ずらしたことで、この四人がこのような官職をもって一堂に会することが不可能になったからである。

では、なぜ洪命憙は「義兄弟編」の小説内時間を五年から三年に変えなくてはならなかったのか。それは『実録』と出会ったためだと筆者は考える。一五六一年に討捕使が出たことや、翌年巨正が処断されたことは野史にも記されている。[87]『実録』に出会う以前の洪命憙は、一五六〇年夏に結義した一党が次の一年間おおいに暴れて朝廷の軍と戦い、一五六二年初めに滅亡するという時間構想を立てていたのだろう。ところが『実録』に出会った洪命憙は、野史や野談とは比較にならぬほど大量で詳細な情報が、それも歴史的事実という圧倒的な重みをもって存在していることを知った。巨正たちが結義したことになっている一五六〇年の夏、『実録』の記事によれば八月に漢城の長統坊で巨正の大捕り物が失敗して右・左辺大将が辞めており、その一人はのちに討捕使として巨正を処断する南致勤である。[88]このとき捕まった三人の妻を救出するために巨正が九月に典獄署襲撃を計画したが中止したことが、十一月に逮捕された徐霖の自白で明らかになる。彼の自白で巨正たちが鳳山郡守を襲う計画を立てていることを知った捕盗大将はこれを上奏、朝廷ではただちに宣伝官を派遣する。[89]五百名あまりの官軍がたった七名の巨正らを取り逃した顛末を報告する宣伝官の復命は、簡潔だが臨場感にあふれている。[90]十二月、朝廷は論争のすえに巡警使を送り出しながら、[91]一月もたたぬうちに呼び戻そうとする。[92]巡警使は青石洞で捕えた盗賊を巨正に仕立てて都に押送し、徐霖との対面で事実がばれる。[93]一五六〇年に起きたこのように刺激的な事件を小説に盛りこもうとすれば、結義が一五六〇年夏という時間設定はどうしても変更する必要があった。起きた事件だけではない。『実録』には林巨正事件に関連する上層部のさまざまな動き、黄海道の惨状報告と原因分析、そして人事、制度、民心など、巨正を取り巻いていた状況を知りうる膨大な記録があった。洪命憙は、それらの記録を材源とすることを決めて、もう一度構想を練り直したと推測される。

(5) 再度の構想

洪命憙は『林巨正』連載中に、小説の長さに関する予定を三度公にしている。当然のことながら、それらはその時期に彼の脳裏にあった作品の構想と関連している。最初は執筆第一期で、「皮匠編」を書いているころである。「百二十回までは『林巨正』を取り巻く当時の社会の雰囲気を伝えてきましたが、いよいよ林巨正が登場します。（中略）多分、この小説は四百回くらいで言いたいことを言い尽くして終わることになると思います」[94]という言葉は、このころの作者が『林巨正』をさほど長くするつもりがなかったことをうかがわせる。先に見たとおり、この時期に描かれた巨正は正義感のつよい近代的な変革意識の所有者で、やがて義賊活動を行なうだろうという予感をいだかせる人物であった。作者はスピーディな展開を考えていたと思われる。次は執筆第二期の「義兄弟編」「天王童」の章を書いているころで、「これまで書いたのが百六十回ですから、この先約半年、すなわち百八十回ほど書けば終わるだろうと思います」[95]と書いている。「朝鮮情調」という創作方針によって巨正の人間像が変化していたこの時期にも、作者には小説を長く書くつもりはなかったようである。ところが「義兄弟編」の執筆を終えて「火賊編」を始めるときには、「青石篇」「慈母篇」「九月篇」と三部に分けて書くことを明らかにしながら、「長々と書くことになりそうです。この先まだ二、三年はかかるかもしれません」[96]と、先が長くなることを予告している。『実録』と出会った洪命憙は、その内容を盛りこんでじっくりと書きつづけることを決意したのである。

以上から、洪命憙と『実録』との「出会い」は、「天王童」の章を書いていた一九三三年八月から「義兄弟編」

表7

新聞連載本	朝鮮日報社本	備考
一五五六年 李鳳学が倭寇退治の遠征途中、湖南兵馬節度使に会う （이봉학이二一五）	一五五六年 李鳳学が倭寇退治の遠征途中、湖南兵馬節度使南致勤に会う （第二巻一五七頁）	『実録』の一五五五年十月一日に南致勤就任の記事がある。この事実にあとで気づいて入れたのであろう。
一五五七年頃 徐霖が仕えた平安道観察使は李樑 （『徐霖』一、二）	一五五九年頃 金明胤に変更 （第二巻『徐霖』一、二）	『実録』によれば、李樑は一六六一年四月に平安監司に就任し、この年九月七日に義州牧使が起こした偽林巨正事件のさいには巨正と韓温を捕えたことを朝廷に報告している。そのとき登場することになる李樑をここで平安監司にしておくわけにいかず、変更したと思われる。だが平安監司になった事実がない金明胤に変更した理由は不明である。
一五六〇年 なし （徐霖三一二二）	一五五八年 李欽礼が盗賊を捕縛 （第二巻四〇二頁）	一五五七年七月十一日、一五六〇年十月二十一日他に李欽礼が盗賊を捕らえることが熱心だという記事が見える。ここでこの事件を入れることで、のちに巨正が鳳山郡守になった李欽礼の襲撃計画を立てる布石にしている。
一五六〇年 なし （同右）	一五五八年 青石洞で捕盗軍士李億根が殺された事件 （第二巻四〇三頁）	一五五九年三月二十七日と四月二十一日に記事がある。
一五六〇年 マッポンイ救出に向かう青石洞一行が途中「南大門外にある親しい鍛冶屋の家に入り、ソウルの消息を伝えてくれる南小門一派の首領を呼びだす」 （결의二一八） 救出の帰途、鳳学一行と天王童がそれぞれ南小門一派の首領に会っていく。 （결의三一二十六）	一五五八年 「南大門外にある親しい客主に入り、品物をさばいたりソウルの消息を伝えてくれる南小門一派の首領の息子韓温に来てもらう」 （第二巻五一四頁） 南小門の首領の息子韓温 （第二巻六一一頁）	一五六一年九月の偽巨正事件に名前の出ている「韓温」を「火賊編」で本格的に登場させる布石として、ここで巨正らと会わせたと思われる。また、一五六〇年十一月二十四日記事で徐霖の自白に出てくる「馬山里の鍛冶屋李春同」を平山戦で登場させる布石として、混乱を避けるためにこの鍛冶屋を削除したのではないか。

の連載が終わる一九三四年九月のあいだと推定されるが、「火賊編」の構想に要する時間を考えると、一九三四年の前半には出会っていたと見るべきであろう。「義兄弟編」を書いているときに『実録』と出会った洪命憙は、とりあえず「義兄弟編」はこのままの方針で書きつづけ、「火賊編」から『実録』を材源にすることにしたと思われる。そして、朝鮮日報社から単行本を出すときに、「火賊編」の内容に合わせて「義兄弟編」のあちこちを修正したり、『実録』からとった記述を挿入したりしたのである。時間や官職を変えるだけでなく、「火賊編」以降の展開に合わせて『実録』の内容を「義兄弟編」に布石として組み込んだ作者の手腕がうかがわれる。主なものをいくつか挙げておく。（表7）

このように、洪命憙は「義兄弟編」の執筆をつづけながら「青石洞」の構想を練り、次に「青石洞」を書きながらその先の構想を練ったと思われる。しかし「出会い」から短時間しかたっていない時点での小説化と、執筆をしながらの構想準備には無理があったようだ。「青石洞」の章に入ってから、小説の流れにはある種の乱れが生じている。巨正の急激な変貌は読者に居心地の悪さをいだかせ、また文章もそれまでのテンポを失って弛緩した感じをあたえる。この部分について姜玲珠は「軌道離脱の兆候がある」と評し、「この時期に洪命憙が疾病と貧しさに苦しみ、また社会的展望を失いつつあったという事情とも無関係ではないと思う」[97]と述べている。だがこれには、この時期の洪命憙が『実録』を材源とするためのスタンスを確立しえていなかったことも作用したのではないだろうか。「青石洞」の章の終了とともに連載が中断したのは直接的には作者の病気のためだったが、[98]『実録』を本格的に材源として取り入れる完全消化のために、作者が時間を必要としていたという事情もあったように思われるのだ。

（6）終結の未完

一九三七年十二月、洪命憙は連載を再開した。二年前に「火賊編」が始まるときには「青石篇」「慈母篇」「九月篇」と三部に分けることを予告していたが、[99] このたび始まった章は「松岳山」で、あとに「巣窟」「笛」「平山戦」とつづいてからようやく「慈母山城」の章になる。かなりの構想変更があったことがうかがわれる。各章の内容を見ると、「松岳山」の章では端午クッを中心に松岳山で起きた事件が語られ、『実録』から材源はとっていない。「巣窟」の章は『実録』記事が材源となっているが、「笛」の章では両班たちの風流の世界と笛や伽耶琴の名手が織りなす絵巻物のような話で、『実録』とは直接関わらない。しかしながら、よく見るとこれらのストーリーはどれもが一五六〇年という時間の枠組のなかにしっかりと組み込まれているのである。

「松岳山」では、十歳になった王世子の冠礼元服と世子嬪揀擇を控えて大王大妃が端午に松岳山で神事を行なうよう命じ、世人の見物熱が高まったことが事件の発端となっているが、当時の世子である順懐が十歳を迎えたのは一五六〇年である。また「笛」の章の最後では、青石洞で笛を吹いた宗室端川令と殺された両班たちの話が兵曹判書権轍の耳に入ったことから、宰相たちが黄海道の盗賊の跋扈を憂うる上奏を行ない、その数日後には司諫院の諫官が黄海道監司柳智善を罷免するよう上奏を行なう。これらの上奏には一五六〇年十月の二つの『実録』記事がそのまま使われている。架空の物語が歴史的な時間の枠組のなかにきっちりと組み込まれているのである。同じように野談を下敷きにして両班たちを描いた前半三編には、このような歴史的時間の枠組みは存在していなかった。

この枠組は、次の「平山戦」の章で見事に活用されることになる。十一月初め、青石洞近くの村の海産物商の息子の死をきっかけに、葬式の手伝いに出た巨正の部下金山と同郷の李春同との再会（この二人の名前はともに『実録』にある）[100]、そして巨正が春同の母の還暦祝いに出席するため馬山里へ行く約束から、そこで新任の鳳山郡守李欽禮を待ち伏せようという徐霖の提案へと伸びていく一本の線と、徐霖の義母の突然の青石洞訪問に端を発して、上京した徐霖の逮捕と裏切りから捕盗大将の上奏および官軍の出動へと伸びていく一本の線が、十一月二十七日の平山馬山里の戦いで合流する。二十一日に青石洞を出て明くる日都に着いた徐霖が二十三日に捕縛されて二十四日に裏切る行動と心理、馬山里で巨正の一党が二十六日に集結するという報を受けて二十四日午後に出動する宣伝官一行の迅速な進軍、二十六日の還暦の宴にあわせて青石洞から馬山里に向かう巨正たちの行動が、二十七日の馬山里での戦いに向かって時間刻みに描写されていく。時間にあわせて空間の枠組も存在している。どれほどの時間でどれほど移動するのか、必要な睡眠と食事はどこで取るのかまで精密に計算されていることが、夜を徹して平山に向かう宣伝官一行の描写に迫真感を与えている。洪命憙は地図を使ってこの地方の地理を徹底的に調査したという。[101] 事実にこだわる姿勢はほとんど偏執的で、このくだりでは金郊から鳳山までの里数を七十里（二十八キロ）間違ったときに、訂正記事を出しているほどである。[102] 左邊捕盗大将金舜皐の徐霖自白の奏上と宣伝官鄭受益の復命というたった二つの『実録』記事をもとに、洪命憙は時間と空間を緻密に組み合わせて歴史フィクションを創造したのである。[103] 架空の義兄弟と実在した人々が戦う場面は歴史的事実と想像力が見事に融合し、まさに歴史小説の白眉である。

ところが、同じく『実録』の記事が材源になっている次の「慈母山城」では、まるで「平山戦」で力を使い尽くしたかのように文章が弛緩する。この章は、妓生におぼれる巡警使李思曾と青石洞を捨てる巨正らの動きを交互に描いてから、最後は青石洞に残った吳哥のさびしげな姿とともに中断してしまう。

洪命憙はなぜ書くのをやめたのだろう。病気、親日の危険を避けたこと、時代への絶望という姜玲珠氏が推測した三つの理由のほかに、『実録』との出会いによる影響もあったと筆者は考えている。中断した時の小説内時間は一五六〇年十二月で、巨正が処断される一五六二年一月までまだ一年以上もある。先述した『資料』収録の巨

正関連『実録』記事四十八件のうち、これまで使ったのは十五件だけで、[104]『実録』の巨正関連記事は多く残っている。そして『実録』によれば、巨正の一党の勢いが盛んになるのは、むしろこれからなのだ。もし洪命憙がこれまで通り『実録』記事を忠実に取り入れると仮定するなら、この先の『林巨正』のおおよその展開は予想することができる。青石洞に残った吳哥は偽巨正にされてむごい拷問を受け、都に押送されて死亡する。[105]九月には偽巨正捏造事件が義州でふたたび起き、凄惨な拷問で何人もの犠牲者が出る。しかしながら巨正らの勢いはますます強まり、十月には王が「現在の盗賊の勢力はまことに盛んで敵国とも同じ」[106]と嘆くほどになる。朝廷は巨正討伐のために南致勤を黄海道討捕使に任命し、非情な性格で知られる南致勤は、兵士を凍死させ人民を苦しめる犠牲を出しながらも冷徹に巨正を追いつめていく。都では潜伏した盗賊を捕らえるために城門を閉ざし市場を休ませて大捜索を行ない、朝廷は討捕使派遣の負担で苦しむ黄海道の田税や徭役などを免除する措置をとる。十二月、巨正は捕まっていないが主力は殲滅したので朝廷が討捕使を呼び戻そうとしていると、一五六二年一月三日に巨正逮捕の報が届く。巨正はすぐに都に押送されて処断される。『実録』には記されていない南致勤の九月山攻撃、徐霖の活躍、一人残った巨正が最後に徐霖に見破られて捕縛される経緯は、野史にかなり詳しい記述がある。[107]

これらの材源を利用して小説を書きつづけていけば、この先どれほどの時間がかかったことだろう。朝鮮語で発表することができ、親日の危険がなかったならば、洪命憙は書き続けたかもしれない。だが植民地末期の社会状況はそれを許さなかった。そのほかに、巨正の今後の運命が記録されていることが、逆に創作意欲を減退させた可能性も考えられる。彼が筆をおいたのは、こうしたすべての要因が重なってのことだと思われる。

最後の「慈母山城（下）」では、青石洞に残った吳哥が孤独に苦しみながら酒を飲む。巨正の見捨てた青石洞に残された手下たちは逃亡をはじめるが、吳哥はそれを止めようともしない。この場面を林煥澤はこう評している。「作家の手で書かれた小説の最後の段落の場面は、まるで夕陽に照らされて死んでいく老人を見るように凄然このうえない。このくだりは林巨正の悲壮な最期の予告編に感じられる」[108]。まさに「当時の暗黒の現実に対する彼の悲観と絶望」が伝わってくる場面である。これを書きながら洪命憙は『林巨正』を未完のまま終わらせることを考えていたのだろう。「暗黒の現実」に対する抵抗の形は、いまでは筆をおくことしかなかったのである。

（7）修正の未完

前半部の修正が未完に終わった理由にも『実録』の影響があげられる。洪命憙が前半三編の書き直しを予告した一九三二年に、彼はまだ『実録』と出会っていなかった。「事実の抜け落ちたものを補充し、事実の錯誤したものを訂正し、だらだら書いた部分は削ったり縮めたり」と書いたときに彼の頭にあったのは、多忙な政治活動のあいまを縫って書いていたために犯した間違いを訂正し、文章を引きしめ、そして何よりも朝鮮情調を盛り込むことであって、これは十分に可能な作業であった。ところが『実録』の史実を取り込んで前半部分を書き直すことには無理があった。「皮匠編」や「両班編」に見られる史実との違いはなんとか修正できるかもしれないが、[109]「鳳丹編」は不可能に近い。小説では、一五〇四年の甲子士禍のとき加罪を恐れて流配先から逃亡した李長坤が、咸鏡道まで逃げて鳳丹と出会い結ばれ、二年後の中宗反正で復権する。ところが史実では李長坤は一五〇五年五月に流配されて翌年八月中旬に逃亡し、九月二日に中宗反正を迎えている。逃亡期間はわずか半月である。李長坤についてはそのほかにも『実録』に多くの記録があり、彼の人となりに関した記述も見られる。そもそも野談をもとに想像力で作り上げた物話を史実の枠に組み込むことには無理がある。史実の枠組をもった後半部分と想像力だけで作り上げた前半三編とは、彼の孫の洪錫中が半世紀後に喝破したように、「修正程度に手を入れたところで、とうてい一つの小説として統合させることはできない」ほど「文学的様相」がかけ離れているのである。それに気づいた洪命憙は修正をあきらめたのであろう。こうして林巨正には二つの「未完性」が残ることになった

のである。

おわりに

以上で、洪命憙の歴史長編『林巨正』に見られる「不連続性」と「未完性」の生じた原因を考察した。読書体験でいだいた疑問を筆者なりに解明することはできたが、その過程で、日本の朝鮮統治が朝鮮近代文学に与えた傷の深さをあらためて認識することになった。

一九二〇年代の社会運動の高潮期に民衆のヒーローとなるべくして生まれた林巨正は、光州事件の余波で姿を消し、文化的抵抗をつづけるために「朝鮮情調」のただよう人物として三〇年代によみがえったが、主人公のこの変貌は小説『林巨正』に「不連続性」をもたらした。やがて『朝鮮王朝実録』と出会った洪命憙は史実を材源として『林巨正』を書きつづけようとしたが、四〇年代の「暗黒の現実」を前に、抵抗のための絶筆をおこなったのである。

註

（1）本研究は、洪命憙の生涯と作品『林巨正』に関して、林熒澤と姜玲珠両氏とりわけ姜玲珠の、以下の研究に多くを負っている。

①林熒澤・姜玲珠編、『碧初洪命憙『林巨正』의 재조명』、사계절출판사、一九八八

②林熒澤・姜玲珠編、『벽초 홍명희와 『임꺽정』의 연구자료』、사계절출판사、一九九六（以下、『資料』と略記する）

③姜玲珠、『벽초 홍명희 연구』、창작과 비평사、一九九九（以下、『研究』と略記する）

④姜玲珠、『벽초 홍명희 평전』、사계절출판사、二〇〇四（以下、『評伝』と略記する）

（2）洪命憙の日本留学時代については以下の論文がある。

①波田野節子、「洪命憙の東京留学時代」、『新潟大学言語文化研究』第6号、二〇〇〇

②波田野節子、「洪命憙が東京で通った二つの学校」、科研報告論文集『朝鮮近代文学者と日本』、二〇〇二

③波田野節子、「獄中の豪傑たち――洪命憙と李光洙が東京で共有した世界――」、『大谷森繁古稀記念朝鮮文学論叢』、白帝社、二〇〇二

④波田野節子、「동경 유학 시절의 홍명희」、『충북작가』二〇〇三年秋号

（3）四季節社からは一九八五年の九巻本と一九九一年の十巻本が出ている。筆者がはじめて『林巨正』を読んだのは九巻本によってであるが、九巻本には「火賊編」最後の「慈母山城」の章が入っていないうえ、現在は十巻本が流布して九巻本は入手しにくいので、本稿では原則として十巻本を使用し、新聞連載本と朝鮮日報社本の対照をおこなう場合はそれぞれ原典を使用する。

（4）野崎充彦、『青邱野談』（平凡社東洋文庫、二〇〇〇）、解説三〇八頁参照

（5）巨正の養育を引き受けるとき、カッパチは巨正の父に「暴れ馬を馴らす代償は何かな（原文朝鮮語。以下、日本語訳はすべて筆者による）」と聞き、すぐに「白丁の腹いせ（설치）かな」と自分で答えて笑う。（四季節社十巻本『林巨正』第二巻、「皮匠編」一五九頁）このカッパチの心理を拡大解釈したのが、のちに北朝鮮で『林巨正』を修正した、洪命憙の孫・洪錫中である。彼による前半のあらすじ紹介の内容は、原典とはまったく違って、カッパチの野望を中心にしたものになっている。（『림꺽정4』、文芸出版社、一九八五、三五五～三五七頁）

（6）階級闘争的性格が微弱なことが問題になり、洪命憙がみずから言い出して絶版にさせたという。（『評伝』、二八九頁）

（7）たとえば「鳳丹編」は最終回の末尾に「第一篇終」とあってタイトルはなく、「皮匠編」も最終回末尾に「第二編갖바치종」とあるのみである。「両班編」の場合は、作者の逮捕による突然の中断のせいか、それすらない。「義兄弟編」が始まると最初のうちは編タイトルが出ていたが、やがて出なくなった。最終回の末尾には「(의형제편)（끗）」とある。「火賊編」のときは小説のタイトルが『火賊林巨正』のためか、編のタイトルは明記されていない。

（8）一九三二年十二月一日付『朝鮮日報』広告参照。広告では「義兄弟篇」上・下になっているが、刊行されたものを見ると(1)(2)である。なお、刊行予告のさい初めて前半三編と「火賊編」のタイトルが確定した。（『研究』、二七一頁、脚注18参照）

（9）「巣窟」の章は新聞連載時には一節構成だったのが、こ

のとき二巻にまたがるために二つの部分に分けられた。

(10) 同年六月に朝鮮日報社本の再版本が朝光社から出ている。「朴ユボギ」の章だけを一冊にした薄い本で、この章からあとは出なかったという。（『評伝』、二七六頁）

(11) 朝鮮日報社から刊行されたときは「잣밧치편」だったが、このとき「皮匠編」に変更された。

(12) 二〇〇一年十月に開かれた第五十二回朝鮮学会において、李美江氏は「碧初『林巨正』定本考」という報告を行ない、字句の訂正や漢字への置き換えが見られることを根拠として、国立出版社本が『林巨正』の定本（作者の最終的に意図した本文）であると主張した。筆者としては、作者が小説の文章に直接手を入れたのは朝鮮日報社本が最後であり、定本と呼ぶにふさわしい版本は朝鮮日報社本だと考えている。しかし、前半三編を抜いた形で刊行することが作者の最終的な意図であったとすれば、国立出版社本を定本と考えることも可能であろう。

(13) 乙酉文化社本は刊行後は正常に販売されたが、朝鮮戦争勃発後に禁書になったという。（『研究』、五四三頁、脚注47）

(14) 『林巨正』連載六十周年記念座談（『資料』、二八七～二九二頁）

(15) ただし刊行されたのは一九八七年から八八年に韓国政府がとった越・拉北文学者の解禁措置よりも前である。（布袋敏博「韓国近代文学研究の現状と課題――韓国での論議を中心に――」『世界の日本研究二〇〇二』国際日本文化研究センター発行、二〇〇三、一四五～一四六頁）

(16) この三巻は新聞連載から直接版を起こしてある。なお「義兄弟編」「火賊編」の底本は明らかにされていない。

(17) 校正者の言によれば、「乙酉文化社本全六巻を基本テキストとし、すでに現代表記に直された四季節社九巻本を組版原稿として、原典対照をする一方で新聞連載本をいちいち乙酉文化社本と対校し、抜けた文章や間違いを補完した。[原文朝鮮語。以下同じ]」（四季節社十巻本『林巨正10』、「校正後記」、一六三頁）という。しかし底本としては、著者が自ら校正したことが明らかな朝鮮日報社本のほうが優れている。また「新聞連載本、朝鮮日報社本、乙酉文化社本をすべていちいち対照して前後を整え、評定、訂正した」（同上）というやり方にも問題がある。テキストは校正者が勝手に訂正すべきではないし、新聞連載本と朝鮮日報社本のあいだの異同についてはもっと詳しく言及すべきであろう。「研究者たちはこの四季節社本のみをもって文学本然の研究を深くおこなうことができる」（同上）という言葉には無理があるように思う。

(18) 『評伝』、二八九頁

(19) 各章のタイトルがあるのみで、編のタイトルはない。

(20) 리창유、「장편소설『림꺽정』에 대하여」（『림꺽정1』、文芸出版社、一九八二、一頁）このなかで리창유は、「過酷な日帝の検閲を避けえなかった事情と創作当時の作家の世界観上の制約のために、小説には種々の不足が見られる。ここに作家の孫にあたる洪錫中はこの作品がもつ一連の不足点を修正することを決意し、精力的に仕事を行なった。[原文朝鮮語]」と書いている。

(21) [原文朝鮮語]、홍석중、「후기」（『림꺽정4』、文芸出版社、一九八五）三五四頁

(22) 註（3）で述べたように、筆者が最初に読んだのは四季節社九巻本であるが、本論文では十巻本を使用した。

(23) 「裵トルソギ」の章でのトルソギの回想と「李鳳学」の章の冒頭に、その後の話が断片的に出てくる。なお「義兄弟編」の連載が始まる前日（一九三二年十一月三十日）の『朝鮮日報』に掲載された予告には、「両班編」の結末が簡単に紹介されている。

(24) 巨正は、仁宗を呪詛する尹元衡を懲らしめた（一五四五）あとは、獄事で死んだ李瀣の遺体を棺に入れてやって鞭打たれるエピソード（一五五〇）以外、乙卯倭変（一五五五）の年まで登場しない。

(25) [原文朝鮮語]、四季節社十巻本『林巨正6』、一二四頁

(26) 同上

(27) [原文朝鮮語]、四季節社十巻本『林巨正6』、三一六～三一七頁

(28) [原文朝鮮語]、四季節社十巻本『林巨正7』、二八二頁

(29) 四季節社十巻本『林巨正2』、一九六頁

(30) 四季節社十巻本『林巨正7』、四七頁

(31) 四季節社十巻本『林巨正7』、二一二頁

(32) 四季節社十巻本『林巨正9』、八頁

(33) 新任の鳳山郡守を襲おうと計画している巨正をいさめる朴連中の以下のような言葉は示唆的である。「お前さんたちがやっていることは、わしの目から見ればつまらん客気が多すぎる。今度のことにしたって、客気でなくて何だ。鳳山郡守を殺せば金や銀でも降ってわくというのか。よしんば金や銀が降ってきたところでだ、そのあと山のような災難が降りかかることを、どうして考えないのか。（原文朝鮮語）」（四季節社十巻本『林巨正9』、二五二頁）

(34) 四季節社十巻本『林巨正9』、三一頁

(35) [原文朝鮮語]、崔元植の発言（『資料』、二九〇頁）

(36) 同上、『資料』、二八七頁

(37) 『資料』、三三二頁

(38) 「この点（林巨正が青石洞の大将になってから変貌しているという点――筆者）は、林巨正という人物に関する実

感を与えようとする作家の意図というより、作家自身の社会に対する緊張感が弛緩したことから来ているものと、私は考えます。（原文朝鮮語）」（『資料』、三三四頁）

(39) 「こうした側面から見て、作家は結局のところ、群盗形態の抵抗がかかえている限界を浮き上がらせることにより、読者たちが批判的な目で見るように仕向けたのです。（原文朝鮮語）」（『資料』、三三六頁）

(40) 「私の考えでは、群盗が主観的には革命的な意思を持っていたとしても、当時の社会的条件のなかでは、義賊の蜂起や群盗の抵抗によって真の革命的変化が起きることはありえないという点を強調しようとしたのではないかと思います。（原文朝鮮語）」（『資料』、三四〇頁）

(41) 〔原文朝鮮語〕、『資料』、三四一頁

(42) しかしながら以下の例が示すように、研究者たちは何らかの形でこの不連続を感じているようである。

「最初は官側と賤民層の連結が強固で、当時の歴史全体を見わたすことができたが、作品の中盤以降になると、林巨正の一面的な側面のみが描かれて、均衡感覚が破綻している。（原文朝鮮語）」（金允植、『韓国近代小説史研究』第9章「歴史小説의 네 가지 形式」、乙酉文化社、一九八六、四二二頁）

「野談運動がもっとも活気を帯びていたこの時期に『林巨正』の執筆が始まったことを見ても、作家の意図は明らかだといえる。ところが先に進むにつれてこのような目的意識は薄まっていき、作家はそれこそ単なる講談師の位置に退いてしまう。（原文朝鮮語）」（鄭豪雄、「不羈의 思想――碧初의『林巨正』論」、舍、一九九四、二七二頁）

(43) 洪命憙と朝鮮共産党とのかかわりを調査した姜玲珠は、彼は一定期間党員であったと推測されるが、思想的には社会主義に傾倒しており、新幹会創立のころには非妥協的民族主義者であって、それは解放後も変わらなかったと見ている。（『研究』、二三六～二三七頁）

(44) 座談会での本人の話によれば、朝鮮日報の安在鴻が、生活費を補助するかわりに何か書くよう要請したという。（『資料』、一七二頁）裕福だった洪命憙の家門もこの時期になるとすっかり傾いていた。（『研究』第二章1．출옥후의 곤구한 생활参照）

(45) 〔原文朝鮮語〕、「『林巨正傳』에 대하여」、『三千里』創刊号、一九二九年六月（『資料』、三四頁）

(46) 洪命憙は十二月十三日に逮捕された。連載は逮捕直前の十二月十一日でいったん途切れてから、この追加連載で完全に中断した。（『研究』、二七六～二七九頁）

(47) 朝鮮日報一九二九年十二月三十日付社告によると、留置場での執筆許可を新聞社が特別にとりつけたという。（『研究』、二七八頁）

(48) 『研究』、二八二～二八三頁

(49) 中断したストーリーの内容の一部は、「義兄弟編」の「裘トルソギ」の章での回想や「李鳳学」の章冒頭にさりげなく織り込まれている。

(50) 〔原文朝鮮語〕、「碧初・洪命憙氏『林巨正傳』明十二月一日부터連載」、『朝鮮日報』、一九三七年十一月三十日（『資料』、三七頁）

(51) 〔原文朝鮮語〕同上

(52) 〔原文朝鮮語〕、「『林巨正傳』을 쓰면서――長編小説과作者心境」、『三千里』第五巻、一九三九．九、（『資料』、三八頁）

(53) 〔原文朝鮮語〕、同上、（『資料』、三九頁）

(54) 『研究』、三二九～三三〇頁。名門両班出身で漢学の素養が深かった洪命憙は、彼らの文化事業を手伝って、金正喜『阮堂先生全集』や洪大容の『湛軒書』などの校閲もおこなったという。

(55) 『研究』、二九二頁

(56) 『朝鮮王朝実録』が復刻されて一般人も読むことができるようになったのは一九三二年のことである。姜玲珠は洪命憙が読んだのは一九三四年ごろではなかったかと推測している。（『評伝』、一九六頁）論者もほぼ同じ見解だが、この件については、次章で詳述する。なお筆者は『評伝』が刊行される前に姜玲珠氏に面談し、そのさい氏からこの事実をご教示いただいて、研究遂行上甚大な恩恵を受けた。

(57) たとえば「弟子」の章第十四節における、男女あるいは白丁差別に関する巨正とソプソビの会話（四季節社十巻本『林巨正2』、一八二～一八三頁）や、「倭変」の章第四節に見られる、존대、하오、하게、해라などの区別をなくして待遇法を一種類にしてしまえばいいという巨正の主張（四季節社十巻本『林巨正3』、三〇六～三〇七頁）などの近代的な思考方法は、後半ではまったく姿を消している。

(58) 『研究』、二九一頁

(59) 「作者の事情によって長らく消息を絶っていた大長編歴史小説『林巨正』を、朝鮮日報のあとを継いでふたたび本誌で連載するはこびになったことは、読者とともに本誌の光栄だと考えます。（中略）今後どのように話が展開していくか、ご期待ください。〔原文朝鮮語〕」（『朝光』一九四〇年十月号、二二七頁）という記者の言葉と、前回までの梗概が載っている。

(60) 『研究』、三一七頁

(61) 〔原文朝鮮語〕、「清貧楽道하는 당대 處士 홍명희 씨를 찾아」、『三千里』、一九三六年四月号、六七頁（『資料』、一五九頁）

(62) 林煥澤は「作家は自身の自我を守るためにすすんで絶筆をしたのだろう」としている。（벽초 홍명희와 임꺽정」、『林巨正10』解題、四季節社十巻本、一五三頁）

(63) 『研究』、三五二頁

(64) 〔原文朝鮮語〕、『研究』、三一八頁

(65) 〔原文朝鮮語〕、『資料』、二七五頁

(66) 〔原文朝鮮語〕、『資料』、三二五頁。なお『資料』の第四部には『林巨正』の源泉資料」として、『朝鮮王朝実録』の林巨正関連記事と、『寄齋雑記』『南判尹遺事』『星湖僿説』『東野彙集』『燃藜室記述』『己卯録補遺』『列朝通紀』『青邱野談』『於于野談』などの野史・野談の林巨正に関連する記述が抜粋収録されている。

(67) たとえば『鳳丹編』にある李長坤の話は『己卯録補遺』『燃藜室記述』をはじめ『渓西野譚』『東野彙集』『青邱野談』など多くの文献に入っている。（野崎充彦、『青邱野談』、平凡社東洋文庫、一三六、三〇八頁）

(68) 『朝鮮王朝実録』を読むために『韓国歴史五千年 CD-ROM』（서울시스템주식회사）を使用したが、巨正関連記事については『資料』に収録されている註66の資料が非常に役に立った。

(69) 『評伝』、一九六頁。

(70) 〔原文朝鮮語〕、口述記事「李朝政治制度와 両班思想의 全貌」、『朝鮮日報』一九三八年一月三日（『資料』、一三〇頁）

(71) 「饗痾雑録」、『朝鮮日報』一九三六年二月二十日（『資料』、一一六頁）。なお、洪命憙の両班観については拙稿「홍명희의 양반론과 『임꺽정』」（『한국 근대문학과 일본』、소명출판、二〇〇三）参照

(72) 前掲「李朝政治制度와 両班思想의 全貌」（『資料』、一三〇頁）

(73) 復刻作業が始まったのは一九二九年で、移管はその翌年である。

(74) 『韓国民族文化大百科事典』、韓国精神文化研究院発行、一九九一／「朝鮮実録考略」、『末松保和朝鮮史著作集6』、吉川弘文館、一九九六、三一一～三二一頁

(75) 一九二六～七年に雑誌『史林』に連載された「朝鮮の栞」に、「朝鮮にては総督府及李王家に、内地にては東京帝国大学に所蔵するのみにて、いづれも貴重書籍なるを以って一般の研究者には見ること難きは遺憾なり」という今西龍の記述がある。（『朝鮮史の栞』所収、近澤書店、一九三五年、二七頁）この状態はその後も変わらなかったと思われる。

(76) 李秉岐の日記の一九三八年七月十九日および八月七日の欄に「城大」で「李朝実録」を読んだという記載がある。（가람 日記（Ⅱ）新丘文庫、一九七六）姜玲珠氏のご教示による。

(77) 「青石編」の冒頭にある黄海道の惨状についての叙述は一部『実録』が材源となっているが、じつはこの部分は単行本にするときに作者が付け加えたものである。私見では、新聞連載で『実録』がはじめて材源とされたのは、一九三四年九月十八日の『火賊林巨正』第四回においてである。黄海監司が臺諫の弾劾にあって交代したのも、長らく蔭除の指定席であった開城の都事に武班がなったのも、自分たちのせいだという徐霖の言葉は、一五六〇年三月十三日の『実録』の三公の議啓と二十五日の司諫院の上啓が材源とされている。

(78) 一五六〇年十一月二十四日、捕盗大将金舜皐の上奏（『資料』、四一七頁）

(79) 朝鮮日報社本『林巨正第二巻』、二〇四頁、四季節社十巻本『林巨正5』、三八〇頁

(80) 『朝鮮日報』一九三四年一月十五日、『林巨正傳』二九七回、李鳳学三－五（三三と誤記されている）

(81) それまで筆者は四季節社十巻本だけを使っていた。四季節社十巻本の校正者が、乙酉文化社本を底本として新聞連載本、朝鮮日報社本とも厳密な対照作業を行なったと述べていることもあって（註(17)参照）、原典コピーは準備しながらも対照をないがしろにしていたのである。初版の確認が研究の基本であることを痛感した。

(82) 以下のように替えられている。巨正・辛巳生四十歳→三十八歳、鳳学・辛巳生四十歳→三十八歳、ユボギ・壬午生三十九歳→三十七歳、トルソギ・壬午生三十九歳→三十七歳、天王童・乙酉生三十六歳→三十四歳、オジュ・壬辰生二十九歳→二十七歳。マッポンイ・戊戌生二十三歳→丁酉生二十二歳。見てのとおりマッポンイだけ生年を変更しているが、理由は不明である。

(83) 『朝鮮日報』一九三四年三月二十八日、『林巨正傳』四四三回、서림二－二十一

(84) 朝鮮日報社本『林巨正第二巻』、三五一頁。四季節社十巻本『林巨正6』、九三頁。なお、この章は新聞連載本では「徐霖」の章だが、朝鮮日報社本では「結義」の章に変えられている。（書誌の表1と表2を参照）

(85) 『朝鮮日報』一九三四年五月十一日、『林巨正傳』四六七回、서림四－九

(86) 朝鮮日報社本『林巨正第二巻』、四二九頁、四季節社十巻本『林巨正6』、一五四頁

(87) 「燃藜室記述」「列朝通紀」など。「国朝宝鑑」には巨正処断が壬戌年の一月であったことも記されている。

(88) 『実録』一五六〇年八月二十日記事。左辺大将南致勤を罷免し右辺大将李夢麟を交代させることを願う司諫院の上

奏。（『資料』、四一四頁）

(89) 『実録』一五六〇年十一月二十四日記事。捕盗大将金舜皐の上奏とそれに対する伝教（『資料』、四一八頁）

(90) 『実録』同年十一月二十五日記事。宣伝官鄭受益の復命（『資料』、四一八～四一九頁）

(91) 『実録』同年十二月一日記事。承政院への伝教（『資料』、四一九頁）

『実録』同年十二月二日記事（『資料』、四二一～四二四頁）

『実録』同年十二月四日記事。李思曾と金世濟への伝教（『資料』、四二五頁）

(92) 『実録』同年十二月二十五日、司諫院の上奏（『資料』、四二六頁）

(93) 『実録』同年十二月二十八日記事、一五六一年一月三日、七日記事（『資料』、四二七～四三〇頁）

(94) 〔原文朝鮮語〕、『三千里』一九二九年六月号（『資料』、三五頁）。連載百二十回は「皮匠編」の「兄弟」の章が終わったときである。この次の「弟子」の章で巨正が生まれる。なお「鳳丹編」は七十五回、「皮匠編」は百十一回、「両班編」は百二十一回で、前半三編の合計は三百七回である。

(95) 〔原文朝鮮語〕、『三千里』一九三三年九月号（『資料』、三八頁）。「義兄弟編」の連載百六十回は「天王童」の章に該当する。「義兄弟編」はこのあと二百四十回ほど続いて、全体で四百回ほどになった。

(96) 〔原文朝鮮語〕、『朝鮮日報』一九三四年九月八日（『資料』、四〇頁）。ここで洪命憙は「林巨正が青石洞から慈母山城に移り、また九月山城に移ってから滅びたことは史実なので」と書いているが、筆者の調査したかぎり慈母山城の名前は史料には見当たらない。

(97) 『研究』、二九一頁

(98) 『研究』、二九三、四頁

(99) 『朝鮮日報』一九三四年九月八日（『資料』、四〇頁）

(100) 『実録』一五六〇年十一月二十四日、捕盗大将金舜皐の上奏（『資料』、四一七頁）

『実録』一五六一年十二月二十日、伝教（『資料』、四四六頁）

(101) 「義兄弟編」連載中に一時挿絵を描いた具本雄の回想によると、彼が洪命憙を訪問したとき洪命憙の書斎には地図が張ってあったという。（『朝鮮日報』一九三七年十二月八日。『資料』、二五八頁）そのほか、洪命憙は五万分の一地図を参考にしていたという証言がある。（『研究』、二八九頁。脚注44）

(102) 『朝鮮日報』一九三九年一月五日、『林巨正』평산쌈（三八）の末尾に、「前回金郊鳳山里数を二百八十里としましたが、二百十里に訂正いたします〔原文朝鮮語〕」とある。

(103) 「平山戦」の章の最後は、宣伝官鄭受益の復命の翌日に王が権轍と金舜皐に意見を聞く場面であるが、これに関する記事は『実録』にはない。復命した十一月二十九日（辛卯）の翌日は十二月一日（壬辰）であり、この日には朝廷の会議で巡警使の派遣が議論されている。作者は実在しない日に架空の『実録』記事を挿入したのである。

(104) 収録記事のうち『林巨正』中断までに使われたのは一五六〇年十二月四日の記事までである。（『資料』、四二五頁）

(105) 「青石洞」の章で韓僉知が巨正に吳哥の本名が「개도치」であると語っているのは（四季節社十巻本『林巨正7』、九〇頁）、一五六一年一月三日『実録』記事にある偽巨正の名前が「加都致」であることの布石であろう。

(106) 『実録』一五六一年十月六日、伝教（『資料』、四三七頁）

(107) 『寄齋雑記』（『資料』、四五八頁）、『南判尹遺事』（『資料』、四六三頁）、『列朝通紀』（『資料』、四六七頁）等

(108) 『林巨正10』、一五七頁

(109) たとえば、趙光祖が副提学になったその年に大司憲になる（『林巨正2』八頁）とあるのはその翌年の誤りである。また、呪詛獄事が起きて敬嬪と福城君は賜薬を受ける（同上一三五頁）とあるが、福城君の賜死はその六年後の一五三三年である。許磁と鄭彦慤の死や陳復昌の流配の年が一五四八年になっているのもそれぞれ史実とは違っている。（「両班編」の「報復」の章）etc.

【謝辞】

本研究は、韓国祥明大学の姜玲珠氏を研究協力者とした、文部科学省の科学研究費補助（基盤研究（c）2「洪命憙の『林巨正』と『朝鮮王朝実録』」）を受けている。姜玲珠氏には何度か面談して研究方向と内容について話し合い、その都度有益なご意見をいただいた。このほか、資料の面では早稲田大学の布袋敏博氏に非常にお世話になった。この場を借りて両氏に心からの感謝を申し上げる。

（県立新潟女子短期大学教授・951-8127新潟市関屋下川原町一一四八〇-七）